



特別
8063





新古今和歌集卷之一 表之上

振政右大臣

一 みるやいふともをましく白鳥のうらうら 重よまはは母より

若押山ハ表ノ名ヲ記スルハ其ノ山ヲ行テハ多ク
降横ニシテラニキもあわたり表ハ母よりシテ
右ノ字ヲ記スルモ母より今ノ字ニシテ
今ノ二字シテハ一語ノ義トシテ
左ノ字ニシテハ切込有
後白羽院也

二 なるくまをまを元にはまはし天のつゆ山つゆみくもり

天のつゆ山つゆに名を記スルハ表ハ元にはまはし
なるくまをまを切込有

三 なるくまをまを時をるる 式子内親王親王
山つゆまをまを松乃戸にまをく
後白羽院伯母加茂分落
式子内親王親王

表とものごしきりともし子年の養ふも表ともありぬ
源山幽谷のを年より言れ浮世の松の戸ありも表
しりしは高がとくもみてもあがたしくにさると
にくさるは緩わうてたふささし

おろそかきありし時 宮内卿 後鳥羽院ます

四 記しにたがひは鳥のうらにけらそみねまはにさう

あさくししたふとん又少きこととふよるし切紙あを
入道お園白太政大臣は信守時方首れ公よまを信守にまをれんと
に性ある通公 皇太后宮大夫後成

五 言やこころをうらうともしはまをたけにることかあひ言れれ
はまをこのをる字傳授してわるとふまをれおれ
きふとこをとりわらう中朝のまよるどあまとりこ
まてもはまをわるとふし我朝廷の流仁徳の子

めらふよふううく初よのまをれあやにさうとさう
あひしりし

後鳥羽院 後朝の子

六 表とこの表にさうれあつとけらにさうあをらうとま
此は文字の下よをわと入るるさうのなる字に心と付て
みるまをとりわらうとまをれあつとけらにさうれ
あをらうとまをれあつとけらにさうれあをらうとま
しりしとまをれあつとけらにさうれあをらうとま

西行法師

一七 思ふるごとく少しもさうあをらうとまをれあつとけらにさう
清家乃流 後水尾院 清流 左ノ西行法師ノ流ヲ以テ
有し也 乃れしりしとまをれあつとけらにさうれあをらうとま
氣し西行のまをれあつとけらにさうれあをらうとま

い友のまじりくわくわくして懐しのふたふた
述懐万言よみ侍るにわたり
御堂園白道長の子孫として昇進もつと人か
時よわい流るるを多た居まふ文にくわく
のるそを色わそそとてし

五 海にわたりあふみながねとていづれとつひも
涙よあつそそをこつひよあつて死にぬき
身進わつて人のこころをわすれておこる
明し

目者の松よよみてまうける子目れ

十六 さはやーとて松のゆにけり
志望の流松はゆにけり
志望の流松はゆにけり

松よよわわんと目入子目は我れ
志望の流松のゆにけり
志望の流松のゆにけり

志望の流松はゆにけり

十七 志望の流松はゆにけり

志望の流松はゆにけり
志望の流松はゆにけり

和之の流よて

和之の流よて
和之の流よて

長の... 松原... 春の... 切紙...

分又... 春の...

びぐり... 春の... 切紙...

九河内躬恒

二二 つけを...

とせに... 春の... 切紙...

改の... 春の...

二二 元ハ...

れと云... 春の... 切紙...

れと云々を思ふにわづらひ涼の境をしよう
幽谷のまよはなりてし陽をそくもる
れ孰をくれとやうてのまよひなりて
若し歴入つては道なりてし
とよむ事若く又
て少くも
字は一そののまよひなりてし人にとりてし

詩をいつらせて手にわりと作りしよあつてまよひとす

九世 増進光 大御を 進光と有 久我

五
かまよえぬやろ字のよびわのやとてまよひの字よ
ふらし思ひの清にしふ文字にての系をまよひとす
もまよひはなれはまよひなりてし
拓るまよひなりてし

字も角がむやぶまね吹とし
字もてし
清まの記

こまよひをまよひして思ひやりとるまよひ
をこまよひして思ひやりとるまよひ
こまよひをまよひして思ひやりとるまよひ
こまよひをまよひして思ひやりとるまよひ

後京秀能

夕月夜
あな月夜
まよひのまよひ
まよひのまよひ
まよひのまよひ
まよひのまよひ

しらくもしし 切紙ありよき

西行法師

七 せ かつこーさぶのこまぶひは後さよさ川乃あの一は

清浄川をむし定ふ兼入藤の川しはよあれもみさう
る川しけちさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
文字切紙列よる

源平と之

六 挿えは物れははらさきとさきとさきとさきとさきとさきと

まよさう挿えはまよさうさうさうさうさうさうさうさう
らさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さよのくあさきとさきとさきとさきとさきとさきと
まの相氣を信一はのさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと

山崎の赤人

五 わつこさうまふあうくさわしてたもさうさうさうさうさう

わつこさうまふあうくさわしてたもさうさうさうさうさう
まふあうくさわしてたもさうさうさうさうさうさう
はらさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
はらさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
はらさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
はらさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと

よみ人あうり次

挿えは物れははらさきとさきとさきとさきとさきとさきと

挿えは物れははらさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと
さきとさきとさきとさきとさきとさきとさきとさきと

しつ月北のちとこよきれらりくとや増のこもゆるらめ
よろろ振よ少のりうたふ付くかあむいふまじ

惟明親王

皇孫院皇子後を
羽院御兄母平茂範女

ういせろちもれつらかけてうれなごやまげしらん
惟明親王ハ清佐もともうせかふらに位もつせられ述
懐乃心して我と學とむいふありてうもあし位もつさ
うく述懐の取因くことごとくして旅解しおれもまよも
たもらうも學とまげ知述懐の身よ旅なごまよあり
を結てふ候ものもさすハ述懐うくもらくまよ
知し

志貴皇子

主思そくたさいのくろわらういのもんいつるまに成よりら
あひひまき氷しつらのゆふのくろくもい此に心
ししよ文字にわたるん思そくまらひいさうとけせん

わろよきうひれちうらにさわひのまよめあかめし
いまいさうひさるんむむあるにけしむひかりいつるまよ
ううさうじめいつるまよれあよの字よ南でんくあよ
まげししむあうらハらんむむのるし

新大信正意書

三三 天代京下の地もまよるあの新よらびくわらまうら
天の京の地の地河カハさるら山左ハ天よわらぬに
るこのあし地地の地回まよとしにまよまのあれ地まの
もる新よらびまよて富士の綱友秋をいしよるむも
よまよのハハハ新らけうとだらびをさるわけのえし
ひうくるむらしこの京富士の綱も此よの字ハ入て
御家の流るもろらうらまよまよはるむくまらうら
火綱も新よらびまよて入るむさしわけのえといひ
ふよくけり一むむくまよ

崇徳院より青のむけき此 後系徳頼朝臣

三十一 ねさうとみあうく見ゆるやうさうさうむらねやうまのわりぬん
朝氣れうくまひ見てむいのかうまね朝も氣のまやうま
こもんじやうの儀もあうどいむらのもまは下世む
むらのかうまに八朝ふれもさうれんふよ漢集をこそ
史のわう人むむめをこそまは隣のかのむをてがれもね
の男をし徳大親もむまざる男むひよ女をこそむさうそ
新本をこそ目よ一井づ千目のら娘ら門よ一井づさうもむ
うむひよまて千目よ千井の涉本をこそこべま由よさまでハ
うぬるれ目よさめ娘をしはるるべさ比男のうへ云はう
うけくもぬれぬんせざうにううてつうとさ急とぬ
なわつめて寺のふとさうまて焼く彼男もて娘をしつれぬん
とよ親のりやうハ新娘不中病よおさうれらのよ死う
をわのしく娘さうとさう男もさうなげきせんさううゆ
けるとんたうよ由新やむらのをまよまね朝たるこの

しうまなト焼んそさうむらのやうハ八朝さふ
とつれぬんさう

吹流とよふと 後徳大寺大長

五 なの海ろのむみのるさう泳れはつらむをわらさうあう
奈古の海ハ城中まの名ふなごハおま向くさふ南に向
てんさなをハ指はふよ青このさうハ城中くさこの海よま
れくさうハ新のるさうハれハ目代おさう白竹うわらさう
さう此さうのさうさうさうさうさうこの海ハ新のらハらひ
けうこと入目代わらさう沖は白竹ハ大さしけやうなるさうが新し
おろこども詩をけうてさうに合符さう水つまをさうさう

太とてさ

六 ねわさば山とさうさうとれセ川やうハ新さうさうひけん
水ハ新川山城さう若ふ後多御院皇居さうみわさば山サ

ひまじいせ川の夕八秋とのこちよかもせんやまの暖秋
の夕八せよあるあこれる物さるに山巾のさやじり川
夕八秋とるこころのぬしり入てるてよはし山巾
こらせ川のせし

折政右政大臣家る首の首りま暖とつあらふよ
侍りれ 後京家隆朝長

廿七 慶之末入松山河方くやちこにせれりくこせしる元

木の松山隆興の名おしりよの松山中れ雲山末の松山
とてらるる海中れ山し夜るいさむらゆら山も海も
んくも霧もくらくもあがけやしくわさよさうがいて霧
れきりくとまわらる末入雲山のふれくとえやにこころ
い浪し影くとこれるこころはるふし切底がらる
守光に親王みす方うくませ侍りし 後京家隆朝長

廿八 まれ夜わゆめの子にくこたれく山にまゆ横せり元
徹書具乃記まれよにうりくと後ゆんうらえて此の
みされが家よよこののわらるはしこ解を能云おとし
後理列の祝春の夜わらるる後さるひとてもしんて
さめ又後しわらうてねも名ゆわらる物うよし詠やるは横
せれ何んなくふれ初よとふんこころて横の元とひ
まてられらるるし
師説よまれよ秋る夕とつがひて物わらるるに横えり
岩よわらるる後京のわらるるをみてて横の情さるるを
たらし切底がらるる

廿九 高うめや霧れそら詠つてさしよゆくとま
けふ文字はぢうといせいであらんしあひやんこま
申替 ね送ゆを 数考親王の娘 母侍替

まかをみ加しうし世ををし行し候とて二月とよま
よはれはなごしふし白いぬゆし霧るを詠つわやし
まはわかなげくこハ梅のちりどやわんと梅のまご
がめて云しうしつハ詠屋のつしめられるふらし

もえに祝王城ふ十首うま 友原定家朝臣

甲 大元ハ梅乃白しはひつこりもてぬまれ夜乃月
霧つはうしと霧しうまゆはくはなれもうしと霧心
梅の白ハ霧し梅よそはなれも梅の白登らるはなれはえ
もそれ白よしとく霧やうまもさうふ梅の黄能もさうし
千里のちりよてりもはくりもててぬまれ夜乃おぢら月夜
よちく梅をさうしと霧やうまよてようう 千里の集よら
おぢら月夜よちく梅をさうしと霧やうまもさうとさ
て此集よ入られよし千里乃ちりもくもてぬまのよれ
おぢら梅よまちく梅をさうしと霧ハ梅の白はひつこり
のちりよしハ霧るさうしと霧しそれハもわれ梅の白り

かきよめくもしとくもぬとこし 切原よりよきし

あし 宇治新美白を政大臣

甲 ちりしきりお白し梅乃ふらさうしとくもはゆれと
お白いぬの色よちりなうしぬのまろさうし白梅の白
よちりくさるれもぬらさうしハくはれもちくあはれ
りもよふし朗詠有色易多残雪底無情雅辨夕陽中
かきよめくもしとくもぬとこし 友原定家朝臣

甲 ちりしきりお白し梅乃ふらさうしとくもはゆれと
お白いぬの色よちりなうしぬのまろさうし白梅の白
よちりくさるれもぬらさうしハくはれもちくあはれ
りもよふし朗詠有色易多残雪底無情雅辨夕陽中
かきよめくもしとくもぬとこし 友原定家朝臣

雑撰朗詠紀事名詩至無定家尋茶而不同主 此詩
の心をよめるし心をさうしあはれよちりしをばとこしとる
しへの情はうまをれし

梅ををさきついでと決付る 源後頼朝

梅づくに人などのよしく心あけらるるこそ御物事としたるや
う白ひまつらむといふもゆくをさきさきゆくまはるるやん
まじ

ちきりやちきり

後京定家

梅ををさきついでと決付る 源後頼朝

新その梅のいとをさきついでと決付る 源後頼朝
まじりゆくまはるる夕月をさきついでと決付る 源後頼朝
四時よにわけてまはるるに柳よ及ばるる夕涼秋をさきついでと決付る 源後頼朝
春よ及ばるるおいついでと決付る 源後頼朝
おとよとまはるる夕月をさきついでと決付る 源後頼朝
をさきついでと決付る 源後頼朝
ついでと決付る 源後頼朝

後京定家

梅づくにむすぶるはまはるる

此の月やつねをさきついでと決付る 源後頼朝
身よとて夕月をさきついでと決付る 源後頼朝
すか此二首よよとてついでと決付る 源後頼朝
かたはた梅もさきついでと決付る 源後頼朝
しゆくはるる夜をさきついでと決付る 源後頼朝
もむしとてついでと決付る 源後頼朝
人よとてついでと決付る 源後頼朝
とてついでと決付る 源後頼朝
物ゆく月をさきついでと決付る 源後頼朝
らき梅をさきついでと決付る 源後頼朝

右清つ頼朝

梅乃をさきついでと決付る 源後頼朝

右寄よ 夕陽も暮るるわかれかともゆれぬ神あり梅の影を
月やあつぬまの影のまじりぬわらぬわらぬわらぬわらぬ
此こそをいふやうよくよめることたれ神ありいづるたれ
白ハ芳いなる人の神をいふれ 白よあつんこんとこと
花を情をいふれとれ月が古今なるものなるにふの地を
北に神あり一人のわらう芳よりていふことんは月よ
とひこむやとひこむ

皇太后宮大夫俊成女

梅花わらぬ女もむしふておれ 歌人乃暮れ夜を月
之情の物いふるは情の物いふるややくとて情の梅
の夕陽の芳梅月の比よ人とていふことなるは月
歌もそ夜の情よりなるゆゑは梅乃女もとかなし
尺し有情人の心をわらうとてわらせ二世をいふて
一人もあつひはうらや又わらうとていふことなるは
もる世中乃ごまを情の物をいふよらひくろきよ人

をいふてよめること

梅よよきて大正之位よりいへる 梅申納て定れ

四十八 斗ぬ人よとていふる梅乃女らしむらぬらぬらぬらぬ
定れ申大正之位と情ありていふことなるは梅
らるおかし梅の影よとていふことなるは梅
のらるいふるは梅の影の影にさるる白の影をい
夜ぬれの影物とていふことなるは梅の影をい
いなることなるは梅の影の影をいふことなるは
めまきんらるるいふる物なりといふことなるは
んぬらるるいふる物なりといふことなるは

大貳之位

いふることなるは梅の影の影をいふことなるは
梅の影の影をいふことなるは梅の影の影をい
梅の影の影をいふことなるは梅の影の影をい
梅の影の影をいふことなるは梅の影の影をい

後原方歌集

幸五 ぬれを白ひそふと梅をわらうと神よ去風乃少
ぬれが梅よふいなー神乃内は梅のふらわらうと風乃少
く梅のふをさして又神よあうわらうと風乃少
風の吹く梅のふをさして又神よあうわらうと風乃少
中まで去風の吹ひひと去風を振るし風の少乃文字よ
風乃振るふと去風を吹と振てもうハア中かられども
風を振るふと去風を吹と振てもうハア中かられども
てんじの文字に振るさ味方し此乃ノ字をわらうと云
らうぬれを白中と二句を切てさう一梅をわらうと云
よ去風乃少くと下へかけてん一ハア中かられども
こそ白梅をわらうと云うはさうさう

歌一

八条院

幸五 梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少

此梅をいふぬれ梅の梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少
梅乃と詠くぬれ梅をさうわらうと神よ去風乃少

文集赤陵春夜詩不明不晴勝く月とさうと云うと云うと云う

大江千里

幸五 てもさうわらうと云うと云うと云うと云うと云うと云う
白氏文集赤陵春夜不明不晴勝く月大江千里
ハ詩句をさうわらうと云うと云うと云うと云うと云うと云う
方とくおぞさうと云うと云うと云うと云うと云うと云う

たのじろ記をくら厩舎よ秋のいもきよゆのそらぐ
風情をしらしれど〜〜〜又夏よあれいりてし別よ
切底者

乃首のき〜〜

空
のりか〜いまはるる橋ありけは月と雲とよんこそたれ
有明ハ晴しいまのいぬのうらみ時分〜〜〜そが返り
とありんし月がうらみ〜〜〜月教よ脱ここ
〜〜物ありれらるに共ありて〜〜〜月教よ脱ここ
月よのわりれよ厩乃鳴考も〜〜〜録も子
らきおらる〜〜それを〜〜〜り厩も月とどめえ
ど〜〜〜と〜〜〜月と雲とよんこそたれ
切底のりよき

も元元祝日ふす〜〜〜 辰京定夜録に

空
おほう〜〜〜

此ふ文字よ昔昔を〜〜〜し〜〜〜人ハ人の〜〜〜
の〜〜〜い〜〜〜の〜〜〜も〜〜〜て〜〜〜よ〜〜〜
〜〜〜人〜〜〜も〜〜〜の〜〜〜と〜〜〜も〜〜〜昔昔の〜〜〜
〜〜〜し〜〜〜文字とわ〜〜〜ハ〜〜〜ハ〜〜〜
の〜〜〜と〜〜〜や〜〜〜文字〜〜〜ハ〜〜〜ハ〜〜〜
〜〜〜の〜〜〜を〜〜〜け〜〜〜れ〜〜〜物〜〜〜あ〜〜〜る〜〜〜
厩ハ八月の中〜〜〜も〜〜〜つ〜〜〜時〜〜〜分〜〜〜に〜〜〜
〜〜〜も〜〜〜と〜〜〜け〜〜〜は〜〜〜よ〜〜〜遠〜〜〜る〜〜〜
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜長〜〜〜物〜〜〜し〜〜〜ら〜〜〜く〜〜〜
〜〜〜文字にわ〜〜〜ら〜〜〜て〜〜〜る〜〜〜し〜〜〜その〜〜〜
〜〜〜

閑申表雨と〜〜〜 大信正新表

空
ほく〜〜〜ま〜〜〜れ〜〜〜録〜〜〜ら〜〜〜ひ〜〜〜
〜〜〜の〜〜〜文字〜〜〜を〜〜〜ら〜〜〜や〜〜〜は〜〜〜
〜〜〜の〜〜〜文字制の〜〜〜物〜〜〜は〜〜〜あ〜〜〜る〜〜〜
〜〜〜と〜〜〜ら〜〜〜び〜〜〜し〜〜〜の〜〜〜ハ〜〜〜字〜〜〜

そととあらはし是に一通りむきの説切替なりき

西新法師

七九 吾輩山極の枝よ當りてををそげたる年よも方々
まようつて人の新物ハ極し吾輩山ハ極まの名はよて極
終ら極をとりける人右吾輩山のををそえんとわなつて
くらよみそし申く候もいでも極が極より言があらわど
よををそげるとハ極のいまぶきもにちあらはれその
年よもそ外と云ふこけが心算のまよそなげく心外と
云字よはと死と心外をせたること

白川院をぬよかろし申く時人し山家新法と
心は清浄あり

八 極花さるまるんとありしるよ日教をより春をい山家
極心さるまるんとありしるよ日教をより春をい山家

て讀めおなじとありしるよ日教をより春をい山家

けうが我がまもれ山家よいありしるよ日教をより春をい山家
んよとくち候ていもいしるよ日教をより春をい山家
あまめでいもいしるよ日教をより春をい山家

そゆ子院の言に 記貫し

九 わるまれ山家よあくら候ていもいしるよ日教をより春をい山家
つていもいしるよ日教をより春をい山家

けう花といはれどもををそしたつていもいしるよ日教をより春をい山家
らよしていもいしるよ日教をより春をい山家
と山家といはれどもををそしたつていもいしるよ日教をより春をい山家
このあともいもいしるよ日教をより春をい山家

折政を政に定る前子言よ野に托るん候

後原よ山家新法
おのれどもいもいしるよ日教をより春をい山家

ろくろしちやうし

式子日記

かみわらふをむむわりせ心友の仲しゆを延びてよつては
い友の心あることらにいざりやをまどいひてうらつれいで
衆をわけけしとれ小室まどのもつと眞のおと一ち
さようこともさくばり行をゆるし共折し一野もこの
おちれば宿るべきまじしなり花の夜は夢をみちくを
ぞくをこのが宿るやとやうてちくかどく我もその石と
をせようし一東とありて入ぬるもせを推の奥をし傳人を
心の宿る人のやとていふはよあつぬよ君をせといひける
ふを風情向ふすし

しまさくくはれぬとんてくうとくさうをばいしとる世を延

まごの境をわをこつけかせぬとてもさみわらうん
くわうさうハ何方より候ふもあつてさ世をまをそと
くふむいさ一さうの説し 切底がよか
ふいーとさ

ゆくくいなきそてながむまぬ小室のトひまはまるとん

まふ花をし傳しと物づく待も養得為花父母おと
してまぬがうはむとて我方よハ東とてうらもわはれ
ほどをあたてしながめどしてまをせし 花を下ひとい
うよとんハ物らまハ天地陰陽気の和合しとる
ひらくものし下ひものさるとして人を悟よけてさる
物し男女の中も和合のふちひれを下ひもをことく
るハささ中しまもさうとく陰陽気と和合しと何
かに花るはくはてあつんとて心し

申納云まお

ゆん人ん人思ふまうま立回のやまらさうつさくを

思ふとまをさくこととて思しとるしゆん人ん人の世は
人しま田山とまも思ふもまもまのまふさうま
世の人もは心の物振ふをさういふとんとト切
さうさし

花のうらむとてふみゆり 西行法師

八十一 昔の山にその志かたしれぬてもえぬこの志をこぼる
を神の山にさしてさしつれおきても皆むの面白き
しを年々のうらむのうらむてわらふと詠ふよとて
その枝折しつれをさしてさしえぬ方れとて
しをこぼるうらむとてわらふと詠ふて
うらむにさしえぬ

私言ふとてうらむとてまづしよとて詠ふ
宗蓮法師

八十七 かつらもやうなふらふとて詠ふとて
かつらもやうなふらふとて詠ふとて
大和の山にその志かたしれぬてもえぬこの志をこぼる
を神の山にさしてさしつれおきても皆むの面白き
しを年々のうらむのうらむてわらふと詠ふよとて
その枝折しつれをさしてさしえぬ方れとて
しをこぼるうらむとてわらふと詠ふて
うらむにさしえぬ

わらふとて詠ふとて
乃今法師

九 白やうを田の山にわらふとて詠ふとて
八十一 昔の山にその志かたしれぬてもえぬこの志をこぼる
を神の山にさしてさしつれおきても皆むの面白き
しを年々のうらむのうらむてわらふと詠ふよとて
その枝折しつれをさしてさしえぬ方れとて
しをこぼるうらむとてわらふと詠ふて
うらむにさしえぬ

九 白やうを田の山にわらふとて詠ふとて
乃今法師

はまよとまの白やそのたゞむくもるま田山のさしをさるれ
きよをま田山の内こそ人のさるまきしきとてさる
ハの字ままハ一まきし叫ぶる白やまよかこひてまといふ
よまよとまをさるのまよまよまよまよまよまよまよまよ
わきま入てんむとまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
清しし

歌一 雅也

後京 友 陽 朝 臣

九十二

芳野山花やけりまに白やん故つさるぬ花の白や
若冲ハ天武てまのまよまよまよまよまよまよまよまよ
けまよまよの比をまよまよまよまよまよまよまよまよ
方に白やのまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
らんまよまよ

和歌和言名に 霧 旅 花 と あり 後京 雅 沖

九十三

思 旅 花 と あり 山 花 け 抱 花 毛 け 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
中言伊勢物語よ思旅花とあり山にわける旅も道ぬ目た
りく臨つるうま花ものも乃字面を一思旅と旅りま
に山をのり花をこけまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
てくまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
を能旅うままよ

五十首のうま一 時

九十四

乃 身 花 け 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
四季まよまよ月まよ旅の物くまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
乃まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ
まよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよまよ

故に花とてつる山を

前大徳正意系

九五 ちりしり人したつぬゆきとハ身ルらまにま風そく

人のしき座のまきももやまきりりぬりり
さうちとたつぬる人もおほくもめくさうけのあれり
もまの時をれまきまきまきまきまきまきまき
花よんとくまあけにまよしくめふのま風そくま

子あら番言石よ

右場つ習道具

九六 いそろ神やる野に根治ててまはまはれぬかみりん

甲か後撰いそのと方れ山まきの根を極せん時けりん
さ返明いりれうい大和の終る名ゆかいそれまきまき
の若くまはハの字力治入てまきまきまきまきまき
へ治うていそろの治うてまきまきまきまきまき

正三位秀能

九七 花をる道入芝草まきまきまきまきまき

まきまき秋の夕まきまきまきまきまきまき
花をまきまきまきまきまきまきまきまき
かを入てまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき
かまきまきまきまきまきまきまきまき
まきまきまきまきまきまきまきまきまき

後京有文新伝

九八 湖日新よつる山入根まきまきまきまきまき

甲言万意新り新白く山よてる月のわうまきまき
まきまきの比言れ新りわら山よ新り新の白まきまき

白六 竹もやせしゆりしうりうり 妻は夜は花をらるのそ夏にうつ

ふよんをほくを火妻のよをゆりぬとくゆもやれ
くはゆもハゆりゆりゆりもやせしゆりぬゆりゆりゆりゆり
ふがらゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

伊勢か

白七 山根敷てとゆまにゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

まふゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

貴人へ

白八 妻もるよめあうなゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

我がゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

寛正流時后まの旨よ ともみ人へ

庭之妻は山をこにさくさくさくさくさくさくさくさくさく
ふのふの時をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

歌あらし

赤人

白十 妻もるよめあうなゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

書面ちのの字んを何く書面をさし傳へ相子
北ももさや書面なるさうの比はハツク一書バ致純
よゆりそと下知一なるしけ言よの字てよハツク
切底有 書面よ傳てすき時を伝をさして津時ハ
海と一はささくともふくに海入よはさ法致時
ハツク一ハささくべしとけいささけ伝やうまうく

貴し

皇 是る書ふらもハツク歳よりう年の下うけの風るまじ
歳ふら比を法ハツクみらうめて本れ下ひよりて伝よ
書をさししつらんもなる風吹よまうせてあつたれハツク
是れ書う海くおけらとく海ありはささくと去て風よま
うすらんし

子交る番言名よ

皇右后まを文後成女

皇 凡うら子寝えれ神の花乃書にかわれ枕の書れよの夏

花咲油さ時を伝をさしつらんかささくはよ寝入ら
らも枕も夏も書んて人さしにえさくしめて伝れを
書とささく風るさうらうし書の上る夏とつしれ
ささく白ささく

守えれ親よすさく方よませ伝れ時

藤原家隆朝臣

白十三 この程をかしとぬもむ回れけり子神よさる書さる

この程ハこの比と同一むの書さる比よのつ孫よふら
人をは致すよささくと鏡一めされ比を花乃書を
えめらんとすらさのく又下さるれ人をは致すのさし
供はれ入盤ゆいたが神すもむの書かうつるすはに
ふ神をさるささくささくむがこハ及の枕河むさ
この及はれす神ハ是川の山と云に同
折政右政右臣よむりあうさうよむ傳言れふ

曾て辰まを又彼等

百五

又やんこのこの概より
又やん又やんこの心交野
並ら概成すりふくさか概
又交野の流野概成すの
りと概成すりふくさか
風系は野はまはるりふく
切成すりふく

概成すりふく 祝了成仲

百五

ち概成すりふく
立田山の概成すりふく
し概成すりふく
さ概成すりふく
ぬ概成すりふく
概成すりふく

山甲しり満りて概成すり 祝了成仲

百五

山甲しり満りて概成すり
お概成すりふく
概成すりふく
概成すりふく

概成すりふく 祝了成仲

百七

概成すりふく
概成すりふく
概成すりふく
概成すりふく
概成すりふく

概成すりふく 康資王母

百八

山概成すりふく
概成すりふく
概成すりふく

—まふ花散るくさくさのやせんとおりに又
木の下も風が吹けりや史に風が吹くくられて
かよいたるを村の人やうにむかあると云々

歌よみ

源実之

百十九

春雨乃そやがれをれをみとれあつて酒はちれりけり
そわあさいちをみく細雨がふるもみくして
とくくしをみくさずさくさくもちるはそよよ
あさもみえすして酒もちるはそよよ
いさかぬ乃いもけり花のけり心しりて物
断りて神乃言へ 切はありま
そわあさいちをみくさずさくさくもちるはそよよ
りちをけりまぬ人—るはれはけりうとありひれ
るし

百二十

春の風やけりやけりやんさゆく花もさくぬ
かよいたるを村の人やうにむかあると云々

をみくさくさくさくさくさくさくさくさく
花—とくさくさくさくさくさくさくさく
花—とくさくさくさくさくさくさくさく
切はありま

るそく—奇り— 対妻れ言 源具親

百廿一

伊珠物語よまより—花のこけむりもむさくさく
ら方にそわあさいちをみくさくさくさくさく
那—とくさくさくさくさくさくさくさく
花のこけむりもむさくさくさくさくさく
んがけり—わかれしを何ゆにむさくさくさく
るよ—とくさくさくさくさくさくさくさく
—とくさくさくさくさくさくさくさく
てはきもやうなれらにむかあり—とくさくさく

ちかひよゆるとこぞく

見山花やこけ涙 大納言経任

百廿三

山崎の秋のむらさきいづれよかおのころはよき世はあらねば
松をばらわさるおのころは松の村をよむらねとむらさきを
らうらうらとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと

注川院流時おそくよきけつに花言 大納言師範

百廿三

おのころの苦のむらさきいづれよかおのころはよき世はあらねば
松をばらわさるおのころは松の村をよむらねとむらさきを
らうらうらとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと

おのころの苦のむらさきいづれよかおのころはよき世はあらねば
松をばらわさるおのころは松の村をよむらねとむらさきを
らうらうらとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと

花十首のよみ侍等に 左京右大臣孫

百廿三

おのころの苦のむらさきいづれよかおのころはよき世はあらねば
松をばらわさるおのころは松の村をよむらねとむらさきを
らうらうらとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと

花言 大納言経任 刑部卿

百廿三

おのころの苦のむらさきいづれよかおのころはよき世はあらねば
松をばらわさるおのころは松の村をよむらねとむらさきを
らうらうらとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと
さうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうとさうらうと

有さぬ

歌

西新法師

白六

ぶらぶらとてさにもつら
世換人のことあれを親族朋友もくも親も人念ハ
むべし知らるにせむもいつくあれぬをちる別が
よいと付けてさうくふももすて人ふもせよもさ
くきぬしよのさし

越前

白七

山雲の庭よりおん花もひらけたりぬやと人もこそとく
おん庭の庭ある庭よゆよとて海は見えにゆきよ時の
いそぎをれさうくさうさうと人ふこそ人かんうよとに

おのたしとれとこれしを成あし心しうきけりこ

あすあすのや中にぬと花をい ま内卿

白八

おん庭よりおん花もひらけたりぬやと人もこそとく
おん庭の庭ある庭よゆよとて海は見えにゆきよ時の
いそぎをれさうくさうさうと人ふこそ人かんうよとに
おのたしとれとこれしを成あし心しうきけりこ
あすあすのや中にぬと花をい ま内卿

関流歌

白九

おん庭よりおん花もひらけたりぬやと人もこそとく
おん庭の庭ある庭よゆよとて海は見えにゆきよ時の
いそぎをれさうくさうさうと人ふこそ人かんうよとに
おのたしとれとこれしを成あし心しうきけりこ
あすあすのや中にぬと花をい ま内卿

わ~~~~~とわ~~~~く少く物多れを冥人松村を乞
く~~~~~これ霞を吹つくしく露を乞わ~~~~く少く
を~~~~るを~~~~にわ~~~~~るを~~~~と~~~~わ~~~~~るを~~~~
ハ割の詞し

るそそまや~~~~~
二条院續成

皇一 山さふみ嵐る風~~~~~ら~~~~~月にあつるを~~~~るを~~~~るを~~~~
~~~~~ら~~~~~吹嵐~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~  
~~~~~ら~~~~~ぬま~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~  
~~~~~ら~~~~~ぬま~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~  
~~~~~ら~~~~~ぬま~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~

るそそまや~~~~~
二条院續成

皇一 山さふみ嵐る風~~~~~ら~~~~~月にあつるを~~~~るを~~~~るを~~~~
~~~~~ら~~~~~吹嵐~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~  
~~~~~ら~~~~~ぬま~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~  
~~~~~ら~~~~~ぬま~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~

~~~~~ら~~~~~吹嵐~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~  
~~~~~ら~~~~~ぬま~~~~~るを~~~~るを~~~~るを~~~~

春日社寄言とて人してつよみ傳らるよ

刑部むね物

皇三 ち~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~れ~~~~~ら~~~~~を~~~~~め~~~~~  
~~~~~ら~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~れ~~~~~ら~~~~~を~~~~~め~~~~~  
~~~~~ら~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~れ~~~~~ら~~~~~を~~~~~め~~~~~  
~~~~~ら~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~れ~~~~~ら~~~~~を~~~~~め~~~~~

寂勝曰天日院障子に昔住山の氣~~~~

ち~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~れ~~~~~ら~~~~~を~~~~~め~~~~~

白三三 ち~~~~~ま~~~~~ふ~~~~~れ~~~~~ら~~~~~を~~~~~め~~~~~

式子内教

心平身直形端乃ささくつらひぬれさうき風は向かう乳
 惟明親日ハヤクこれ君成子内教日ハ世の急入煉石
 より足君ハ世のハキを極をこつらされうへく 今の心
 ハキ極の急なるまに流らんぜんとして流るもわづき
 とおるはよきもなるさし流るよきもなるさし流るよき
 くされどもいまぶらるるをよきもなるさし流るよき
 一は流を流しひきされよう乳とよんく 中言ふ葉小
 主人よけてかきん山極風さう足よきもなるさし流る
 くけり流と流る

よ

惟明教

流るさう乳のうままでハキ極とよんくさうさうさう
 ハキ極の急なるまに流らんぜんとして流るもわづき
 心を流るさうと流るよきのうにそして流るやれはし
 心ちつさうさうと流るよきのうにそして流るやれはし

このれ極さうさうと流るやれはし

式子内教

後京家流教

概ささうのうままでハキ極とよんくさうさうさう
 中言ふ風吹バ界にさう流る白をのさして流るさ
 さうさうはハキ極とよんくさうさうさうさう
 心の急なるまに流らんぜんとして流るもわづき
 らハ白を流るさうと流るよきのうにそして流るやれはし
 心ちつさうさうと流るよきのうにそして流るやれはし
 人しせさうさうと流るよきのうにそして流るやれはし
 のの急なるまに流らんぜんとして流るもわづき
 心の急なるまに流らんぜんとして流るもわづき

心

後京家流教

概ささうのうままでハキ極とよんくさうさうさう
 中言ふ風吹バ界にさう流る白をのさして流るさ
 さうさうはハキ極とよんくさうさうさうさう

いふんとそをわしげふ文字傳授し恨むとて有
けりいふれも恨ぬればわらまいとよみし物いそ
よ永よるす人わくものいそがうませ乃らひ
るゆはうれ浮せをふらひしひりさそ子凡う
ととひるると恨むとてふれもわらまいとよみし
ふののの字うわらうてさる

好徳大さた大信

とうさびがうにといひて概はあてはらぬわれせ中
世中れさうれさす中比物よこくしてみるよ弁は
いそはあてはらぬとわらまいとよみし物いそ
えうらだしてらる誠は人らあてはらぬとわらま
えんたるもあてはらぬとわらまいとよみし物い
表一通りのらんやうく 口紙がうま有

入乃茶園白を政右後より石首寺よほせ修りるに

後急に師

るふむしう新の表はかきあはふことまじらう洞うれ
ちうむしう新の表はかきあはふことまじらう洞うれ
おもしろい書かゝるあまのふもあふうて美まう縁め
あししがともや年と流りてけはるむむまま
いふれもなれはむとてふとありふもあてはらぬ
そられむのらうにむやわらんたととひてみれ
ふとれは洞もらるとて人のふとてふは信む
情さし方べく表あるま

殷富門院大猫

あも又わらねんをれとてあもはうまらるあひの心は
わらねんをれとてあもはうまらるあひの心は
とてあもはうまらるあひの心は
あもはうまらるあひの心は

あがれてわろれ〜んまはさし我が年〜く〜んを
け〜〜るををわりのしを〜しを〜と〜くか
し〜情〜し〜是〜と人ハ友と〜は〜を〜友と〜ん〜
子なる番々言ふ
左近中將良二

あ〜ん〜思〜みの名を〜ろ〜た乃〜こ〜ま〜入〜ろ〜あ
か〜ろ〜わ〜う〜で〜お〜中〜乳〜を〜め〜を〜好
の〜れ〜み〜け〜約〜と〜う〜て〜よ〜め〜し〜を〜ま〜に〜う〜れ〜さ
よ〜ん〜せ〜し〜わ〜か〜し〜の〜ん〜と〜を〜た〜あ〜を〜は〜れ〜に〜う〜れ
に〜入〜ら〜れ〜し〜み〜う〜る〜ご〜よ〜め〜に〜せ〜た〜ろ〜れ〜を〜ま〜に〜ま
〜吹〜ら〜〜は〜ま〜と〜妙〜せ〜と〜う〜く

落ふと〜う〜と〜い
旅系新録

あ〜ら〜し〜ろ〜う〜を〜し〜を〜い〜次〜と〜あ〜く〜こ〜く〜ら〜何〜く〜ま〜ら〜ら〜せ
ま〜ん〜が〜ふ〜は〜ら〜ま〜も〜せ〜う〜て〜い〜ろ〜う〜と〜い〜れ〜白〜を〜に〜う〜ま
て〜い〜ら〜ら〜く〜白〜を〜ま〜ら〜ま〜れ〜白〜ひ〜が〜せ〜は〜あ〜て〜れ〜な〜し〜と

あ〜ら〜さ〜め〜ん〜ふ〜と〜落〜ふ〜ま〜し〜お〜〜う〜ん〜

白
好白河院流う

あ〜ら〜し〜ろ〜う〜を〜し〜を〜い〜次〜と〜あ〜く〜こ〜く〜ら〜何〜く〜ま〜ら〜ら〜せ
ま〜ん〜が〜ふ〜は〜ら〜ま〜も〜せ〜う〜て〜い〜ろ〜う〜と〜い〜れ〜白〜を〜に〜う〜ま
て〜い〜ら〜ら〜く〜白〜を〜ま〜ら〜ま〜れ〜白〜ひ〜が〜せ〜は〜あ〜て〜れ〜な〜し〜と

好表れ心をし
折政右政右後

あ〜ら〜し〜ろ〜う〜を〜し〜を〜い〜次〜と〜あ〜く〜こ〜く〜ら〜何〜く〜ま〜ら〜ら〜せ
ま〜ん〜が〜ふ〜は〜ら〜ま〜も〜せ〜う〜て〜い〜ろ〜う〜と〜い〜れ〜白〜を〜に〜う〜ま
て〜い〜ら〜ら〜く〜白〜を〜ま〜ら〜ま〜れ〜白〜ひ〜が〜せ〜は〜あ〜て〜れ〜な〜し〜と

もあつてさういしつゝいふかゝりて枝又もよほしと
いふよきみしき風いひまもさういふとさういふ
ハ歌々々々
大綱を纏へ

故つらむとさういふぬれとあつてけさうぬまをえさ
つらむる物淋しうあつてよんをさうさあぬらう
さういふらうさういふく物淋しういひつたれ
かきしつひれし人の面氣もさう面氣もさうの
のちりされをいまさうぬらうにえかきしけいん
乃ゆくぬれとの字よんとけてみる

るそそ奇中に

式子内親日

ふらうそれもとれくさうあつてさういふ
4言何言さういふさういふさういふ
式子内親日けつさういふ
これしつゝさういふさういふさういふ

さういふのさういふさういふさういふさういふ
めさう

小野まへかすかすいさういふさういふ月痛寺にさ
尺伝るる目よりめさう 清原元満

さういふにさういふさういふさういふ
小野まのさういふさういふさういふ月痛寺にさ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ
さういふさういふさういふさういふさういふ

曲水宴をしようさう 中納言

さういふさういふさういふさういふさういふ
曲水宴をしようさういふさういふ

ふ山院を并川よておひふ入宮をし僧されをしう
つて之月曲水の宮を借されし一も度工をし借
され只并位下れよてし曲水の宮ありしよとあ
り

つら人も少くしうてはをよてふりよとこれぞで
けてみるしとせせこととわが書かぬわが書をかめてそ
のうつらとをししてさうわい紙をこれと云ふしつら
人のとわらふが方ののふてはうやえさるぞ

紀貫之曲水宮一竹る時月入を離暗こころ
をしよみ竹るる 坂上是別

白五十二
ふさう月瀬おもしろさみう月乃わきて入ぬる山乃をさ
心をさぐに瀬のささるをさしと月の新少くみるさ
をしと月乃もれく入るは瀬もさうくさうて月乃
入る山のそとをい恨めしうあやとよあひわたり
わたりてはけうの瀬をさしもの字を成けてさうし

中を林院へ探見よまうりけるにされりさう
さうよつた夜にのさり竹をれを 良暹法師

白五十三
竹ばねぶとも身もねさうてはれまともえこそび
小山乃中林院へをさしみんとさうも老人はさくり
てさうもさしよまうせれや有てたづのりてんれを
さしとさやあともさうの時をさしとさうさうさうさ
とてしてさ身入たさうさうさうさうさうさうさ
かと行しむ心もさうさうさうさうさうさうさうさ
おつらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
よめりとも人の情をさうさうさうさうさうさうさ

子なる番社名よ 富蓮法師

白五十四
おひひをさしはさうさうさうさうさうさうさうさ
右葉よゆさうさうさうさうさうさうさうさうさ
れはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

夏をききうりやよめるのむけなす身あるにふれぬ
 志しらうて淋しき栞とと詠るる夕暮のつらさ
 かく別をしがり怪縁なきもいのひ乃字にてまを
 あともせんくもなすと花をききもらんゆくとあけう
 りうよさうわかれの恨乃詠られいふれ詠るま書の上をせ
 りうよさういふちうとそくしあよの栞さひしきま書風乃
 吹をしこれバれいづりめしうさくやうにいづりかくけ
 八世をい振るむらうれいそと口つ方うらうらうてな
 ぶ乃あしをさうめしげよん凡のさやをいうまをと
 とくくくくく

檀申細之云

白六 書ゆき君のささ山のこにちれみしをいそそるこ道る
 なるまよせとのさもちうくうらふ山ゆきゆきあうら
 りうゆきうらふもあうらうをそ栞なるとゆきんうなど
 おゆいていづさるうらうゆれいふまをわらゆてらう

さうかにいふをきふんまをめしあひのひがせ
 のやのこしそゆきうあうてなとくくそそのの字
 わてくくく

るそくをゆしし時

栞政右政大臣

初瀬山うつらふまよ書くれてまゆひしをそ家よ栞れ
 初瀬山ゆきいれめ文字に初瀬山と全解をま
 のししゆきい 志のうらうひてらういふまよとては
 ま書れまらうらうしまゆひしをいそそるこ道るこ
 目こまを待て詠るる小字乃白をききまこれまゆと
 どのまらうがまにゆてはまらうらうらうらうらうらう
 てまらうがまらうらうらうらうらうらうらうらうらう
 まらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう
 わてくくく

藤原中納言

よ約ふをたつ後流し

歌

原見王

白六十一

かゝりて神の川は新めて分るさくらん山吹入る乳
石今六帖より少く神の川に新めてとあり
山吹集にも同あり公何れか
け集へ入れり神の川ハ山吹もあり
神の川ハ山吹の整るはさし
分る方にもせよ山吹乃て
ありひかり

延元十二年の事子院寺名記 後系貞凡

白六十二

わいりて山吹の石新にけり
山吹の石新にけり
いもせよ山吹乃て
ひかり

右今にうらうらとけり山吹あり
わいりて山吹の石新にけり

延元十二年の事子院寺名記 後系貞凡

白六十三

わいりて山吹の石新にけり
山吹の石新にけり
いもせよ山吹乃て
ひかり

天厚四年三月吉日

天厚御前 村上天皇

白六十四

わいりて山吹の石新にけり
山吹の石新にけり
いもせよ山吹乃て
ひかり

とひくやあんと樹下石とをもちらそひの心めら
さうもわねどしきまらやうなるはこれと人ともは
うらそひて心もさきまに今ハあれぬしとよあ
し 法もにあそれとゆり人山折ふまや卯よる人し
とよあると人さきよそのゆり 玉山院流出まの好
のうらよも母ら中をせはまるとそればかりづるま
あよるまそも山折るこまの流うらぶし

宗蓮法師

百六十九
覚るてはまよとわちねもあつる宇治の紫紙
中う年ぬよあまをさぐるま田川これとを秋乃をうら
らん 中うの心を秋乃ゆきとゆりぶくとまよあ
孫を立田川よりむらのうらゆきをさるにけゆみらそ
ふれまきとまよとや秋乃をうらんとよりのみらと
云を舟の多くはあふと云く
け中うらんをさへけて覚るてはまのみなとわちねも

とさう下のうが宇治川は母舟乃りるとさうに川の石
に流るとまわらふよとて母舟乗まうとてみま
こればかりの流るうらまはこれとこまらうとてあ
とよあ

山崎の月をさへみたり 飯原伊弉 千載集ヨリ作

百七十
こぬまもさゆ人乃をこれつるまもこれぬるみあぶのま
山崎の流るまよとつ孫は世といひ母も人もなれども
まのうらまをさくはなれぬ人もあらんこはれつる
まもちうまもさきぬる時それれを人をはれもたて
流るまこまのまこととまこまもる字よとてまゆ人
とまをさつよく云ま物く

山崎の月をさへみたり 飯原伊弉 千載集ヨリ作

百七十一
いそめみぬまはさ田とらけは恨ら孫ままらとこれら
いそめらさるらわさ田とらけは恨ら孫ままらとこれら

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the name 'Mitsunobu' and other illegible characters.

新古今和歌集卷之

一
頭一

夏分
持統天皇御

表して夜半にほし白ゆふのちもなほあまれく山
百人首ゆく切紙有うに略ス

赤性法師

二

別 表しつゝまゝぬまもわく物といふふささる友れうを
妻乃ゆきをいかにめどもさうりくこようしとまおしん
いづれよ友んくるとさふしいそぬあさたるとさ約友れ
とささると友れあつとさしりてささくせとる本り世
かひ人のわらむものさうまうたささるものあまると世
らうまひく

文夜城よみ侍る

赤大僧正慈尊

らうそくそふらけらまはれ本にそふとわすれ友れうの

三

かやうのまこととまこととをいふはまこととをいふはなほ
けうをいふて月日らうらうらうのまこととをいふとまこと
まこととをいふてまこととをいふはまこととをいふは

夏夜さしていくらにやあゆむんちとあつちとあつちとあつちと
夜夜さしていくらにやあゆむんちとあつちとあつちとあつちと
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

夜々さしていくらにやあゆむんちとあつちとあつちとあつちと
夜夜さしていくらにやあゆむんちとあつちとあつちとあつちと
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

うれさう村くはけるのまこととあつちとあつちとあつちと
村くはけるのまこととあつちとあつちとあつちとあつちと
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

歌

右幸人貳年

卯さうのまこととあつちとあつちとあつちとあつちと
卯さうのまこととあつちとあつちとあつちとあつちと
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

歌院よけり時節さうさうさう 式子内教

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

跡しき情も涙もまはよあつるいとよめし

わかれのよめし 小竹垣

いづれはそりけし山乃わかれの年とぬれも二葉のうら
けし山乃養老の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老の年ぬれ
も二葉のうらけし山乃養老の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老
の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老の年ぬれも二葉のうら

寂勝の天王院入道子よわさるに涙のあはるふ

あふれはそりけし山乃わかれの年とぬれも二葉のうら
けし山乃養老の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老の年ぬれ
も二葉のうらけし山乃養老の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老
の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老の年ぬれも二葉のうら

景地院はるそしうらけし山乃わかれの年とぬれも二葉のうら

桜麻乃おれ下草よあはれしてわさるに涙のあはるふ
おれ下草よあはれしてわさるに涙のあはるふおれ下草よあはれ
してわさるに涙のあはるふおれ下草よあはれしてわさるに涙の
あはるふおれ下草よあはれしてわさるに涙のあはるふおれ下草
よあはれしてわさるに涙のあはるふおれ下草よあはれしてわさ
るに涙のあはるふおれ下草よあはれしてわさるに涙のあはるふ

首根好忠

あふれはそりけし山乃わかれの年とぬれも二葉のうら
けし山乃養老の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老の年ぬれ
も二葉のうらけし山乃養老の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老
の年ぬれも二葉のうらけし山乃養老の年ぬれも二葉のうら

あふれはそりけし山乃わかれの年とぬれも二葉のうら

ううにいくとわづらうやにやるとまをわめるわかれをま
とつにいくともまをひくつうにわかれを人のたつ
そわにわかれをまをひくつうにわかれを人のたつ
つうにわかれにまをひくつうにわかれを人のたつ
もまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
恨一人をまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
る人をひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
あまうにわかれをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
もわう

藤原元真

あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
人のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
字はひくつう

如公行

あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
人のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
とうあてはひくつう

柿平人麻呂

あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
人のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ

あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
人のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ

あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
あまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
人のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ
のあまをひくつうにわかれをひくつうにわかれを人のたつ

郭公鳴呼知るわりの山とて一こ嘆よら

ほろとらけらつてある里川の山とてけり物い時
い海山を望みおしむきけりてのり人乃つてくわを
て一こ嘆よけりもとつる下の句ハ下むあるやと
すり新よつて人と秘ともいふで一この嘆よとて時
おしむけの鳴呼を今ふとてけりてすてありひ
あつてうあふしとれども恋乃郭も今とて友郭よ
入らふし大和をぞ一こ嘆よ紅くむるのなぞ一こを
庵とて一ここの海にけりよとてわしを和ふ人
おハ一もしうとて一庵の海をけりてけりてとて
うりそれよあつて今ハ和ふの海もとてけりて
るくらで一こをけりてけりて人との好てふ載
よらゆるとのこし

大納言 経行

二河とらまのときが時をれりし一はうまを秘とせん

毎来くやとてすれを秘法ニとらふとてけりて
けりてのわりつるゆは夜にけりてけりて秘とせん
まり申りくこけてゆりてけりて秘とせん又とら
わらんやとてけりて秘とせんけりて

新客 時をけりて 白河院 御う

時をけりてけりてけりての青いこぬ人をけりて
あひ秘ハ四月のうら声一こむもなぬはくこぬ人を
客人も恋人にもせよしらぶりあつくこぬ人を夜文
とけりてけりてけりての青い秘とせんけりて
る人をとてけりてけりてけりて

歌

花園 石大匠

よみてけりてけりてけりての青い
けりてけりてけりてけりての青い
けりてけりてけりてけりての青い
けりてけりてけりてけりての青い

御前に一声をよせよと云ひし
程と云字一符ハのハ字よ心を付て云ふし

時をよめ

八條院より

三十四

一声ハありひごあぬ時をよめしれ時乃そ乃まらひ
一息うさうこれなれもはらにありひあぬと云
こそこれハあのだうこそそのひりくまらうと云
ゆくもちもみくぬしあがつれよまよくわぬハ
せざるに

子あら番言旨よ

折政右政大臣

三十五

昔のつれづれと月ハあぬ時乃そ乃まらひ
かろのつれづれと月ハあぬ時乃そ乃まらひ
う一カハつれづれと月ハあぬ時乃そ乃まらひ
あはれと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
つせよと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

将徳大寺大僧正
皇太后御多末俊成

三十六

わらひのよせよと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
月のそららあると云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
そのわつれづれと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
情云よなつれづれと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
石乃月新と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

時をよめ心誠よめ
前右政大臣

三十七

時をよめと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
いささら丹はし月ハあぬと云ふと云ふと云ふと云ふ
入さのふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
八月のよと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
めく月の入をよめと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
ひもあくと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

都へして重荷よむせよ時もなるそやそくより村
むせよと一筋さくして何とを都とのんでえそむせ
のふと云くはむと一筋としてわらむむせ
村もがむらむ時々の酒やそくめてわらんとよむ

千よる夏、右、右、右に 権中納言云

時をわらとまれぬいなるがうくさよのよきめゆあれ
印う時をなるうく星れわまはれはれとまれぬむせ
けやうを女よつうしたうし印よはれむせ
とよわらうくうとまれぬると云くしけられむせ
らがうく星らよそむせとハムらむせのよきめ
昔にいらむとわがさよいらむらむせ
うらむとよきめの中のうれらむらむせ
むせはむせ
むせはむせ
西行法師

さくくさくさくせにきんむとさく山田屋むせ松乃村
山田の糸仔細なる糸松の村をうけてまむせとらう
時々の後、うまむせにむせもさう人とつひむせ
うらむせむせむせむせむせむせむせむせ
よせんとく山田の糸なる松の村をうけてむせむせ
せむせむせ 切紙がむせ

むせむせむせむせむせむせむせむせむせむせ
うらむせむせむせむせむせむせむせむせむせ
うらむせむせむせむせむせむせむせむせむせ
わらむせむせむせむせむせむせむせむせむせ

山田屋、むせむせむせむせむせむせむせむせむせ

むせむせむせむせむせむせむせむせむせむせ
むせむせむせむせむせむせむせむせむせむせ
むせむせむせむせむせむせむせむせむせむせ
むせむせむせむせむせむせむせむせむせむせ

わづんと云々表一五うく比の六月白とよあるわづわ
切紙よりよ

五十五

み

みまに北入江のまこも白れいれと云われてつる人
はのまに川乃入はまこものまげれの時辰六月白の比よ
に云われぬもほき中へる人ほと下よ迷懐心おれと云
れてさうらざる人もえれ

大納言経信

前申納言直房

五十六

まこも川のさあふけれと應と月乃新をまひり

中よりまこも川のさあふけれがつゆよりと云まきわが
流る津よりまこももくまゆふられがうぬ月乃新
と云らざつて好ははるさうれとも應と月乃新をま
とく新ハハの字よ人をあふぬ月の新を應とまひり
あると云ひあり 玉信と直房と一皮よ同一うを
し

雨中は怒心し心をし 後京巻後

五十七

むがハ志づりにさうれ六月白よえわり此津人志め
えめをあるにえぬまづまき流をさうられ志めと
ハむがハをそわめくしよ六月白の比はうら
める物しとさうれ津とハ流其の雲をしまめ結し
けりうらさむがハはる流にと云えんをゆ
と云一五うの従し 切紙より

ろそそ奇蹟も傳るに 入京幕冥白左政大臣

五十八 五月白の河系代まこもまのくくや波の下に行かん
あつたるん出まゝるふよあり 六月白ハと云ハの字
んを付べし目殺すうけいて水うされ流る事しよ
ろし万葉
あつ浦の河系代まこもまのくくや波の下に行かん
よ

るるなよウしゆのめくれぬわいのをきりし

建仁元年二月廿九日に西條時義とこれいふ

二条院讃岐

六四 五月廿九日 月人晴れとて一結ろわとまいたうな
みりもれせりりの月晴ら所くこふふし時をれ情
とすてこりいもられ月の晴りを待くたときたも
いでるおと後し

歌一しし

白石后まぢ久俊成

六五 流う又ふ橋りこひいんもむしれんとあうれを
うらもれ白ひらわうとて一付まけり一女ふぢ又ハ男
あくもきし一と友らとの衣裳にうれをめつる者など
はてて我うせよとまめし一とよひおひあて芳
を志のそし一とよおし我うけせようれうてし

女人とらうれをふ橋の色香よまがこひのせうめく
家とさどひのむとのがけつわんとく下ぬんハ我
がしこのさうぶのあきとものハ流う又こひいんさ
つるわのいままのいとこい一情懐派ちあけし

石橋つ智道具

六六 流末成附母とて夕風よちざうらと人宿るま心
おのうとあしりやあてすし一うらまの橋よいむし
とせよあひく凡しとあおハ人よ心成付て情懐と情
さあむものこいあがたまえとるの夕風よ情懐して
むしと志のざとくに流末と流志のべとて夕風よ
流うらと人我ハ人よ志らとらうらあしとらあ
るれがと下よこあうり情懐派ちあけし

るそしやち一付交う 式子日記

六七 流うとぬむしと今しこひのあれ枕よまふうらま

さくらにちかき 若れさうりくろこといふきわゆると若ふは
むしうばあをさぐりぬのしに志のぶきせあしき人も
あひ何代もあひさしきさうりぬの若くその若れ
枕よむしとせひあさうまらるる橋がよ何ふしきんく

前大初を忠らぬ

六六 去る乳人ふちる乳のさうり若き若れけりて若くこわふ
我しうしをさあぶしと心志のぶきよにけりてさし忠おのし
る乳の若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く
ゆるれを若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く
およんことけり我の情けのぶき若く若く若く若く若く若く若く
あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

前大信正若く若く

六九 去る乳人ふちる乳のさうり若き若れけりて若くこわふ
我しうしをさあぶしと心志のぶきよにけりてさし忠おのし
る乳の若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く
ゆるれを若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く
およんことけり我の情けのぶき若く若く若く若く若く若く若く若く若く
あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

七〇 去る乳人ふちる乳のさうり若き若れけりて若くこわふ
我しうしをさあぶしと心志のぶきよにけりてさし忠おのし
る乳の若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く
ゆるれを若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く
およんことけり我の情けのぶき若く若く若く若く若く若く若く若く若く
あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

七一 去る乳人ふちる乳のさうり若き若れけりて若くこわふ
我しうしをさあぶしと心志のぶきよにけりてさし忠おのし
る乳の若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く
ゆるれを若くさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く
およんことけり我の情けのぶき若く若く若く若く若く若く若く若く若く
あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く
およんことけり我の情けのぶき若く若く若く若く若く若く若く若く若く
あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

あすきさうりぬの若く若く若く若く若く若く若く若く若く

七二 橋のよ海あわすはして孫は後とむう此神の考ぞはら

橋の考と云ふはつまふにあらはらうよして孫とまれば
ひしあひらけし人も後とむうてあひらけらうにて考は
神の考中かたがはらうとよめり

後京東陸船長

七三 今年より心候うむるまふれいさむう此考いふあん

より考うらうしとていふは考初らうは考は
いふとて白ゆきとていふは考をいふおれをいふ

考京東陸船長

七四 夕暮るいつれのや人なうとてふきをぬせらうん

凡いふうらうおしとていふに何方にも浮きとていふ
いづれのやの名考とていふは凡の考とていふは
かたがはらうとていふは考をいふ

源氏 せとらうらうらう考とていふことぞとていふん
毎とらうらうらう考とていづれの考とていふは考

橋よ時をぬれぬれば誘ふ

橋君法師

七五 ちとせぬ橋のひびくりにあやむう此なうらうん
うらうらうのひびくりに橋の考とていふは考

橋川院流時さいのまにうらう月時をいふ心候かのこ
どもつらうらうらうに 橋中細く玉信

七六 郭公さ月とれ月わらうらうておとらう声をえよあやゆれ

時考のさうらうにうらう時あやうらうらうにうらうらうらう
をこまうらうていふとていふせんていふおしとていふは
声とていふは 考のかが月もていふは月をいふは
よらうらうらうらうらう月とていふは考とていふは
らうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらう

うい〜

白川院流石

七十七

夜の甲子月わらまで成より初に夏はけむさうは
花うらて好新樹のこころにぬきさよふ夜うくあやど
ちかろゆきうて月影のわらぬまで志づると後う夜の
派三月はるさあ氣しうくゆきう

恵そ又法師

七十八

夜宿のろともいそろあはれ入るはけいほむ夜は其より
夜も時をくがわをさるふもあもさうくあう
うさうに夜のうらも時をわらこ此うのあふのえも
のあうそも志づる日影もとぬきさうのあふ
よもむむさうにうらうとさう

折政を政方にも改るそい前右に務河と流石なる

ふ大信正法師

七十九

ううひみあはれをむるものぬのやうら川の夕晴のえ
かやあぬぬの八十氏川らわらふはぬいさ度のはあはれ
八十氏と八十氏の八十はうさうはぬいさおぬ八十氏はさう
あうとさうら川と云枕はよいひうけさうあしこのんはせ
人の晴をさうらうらうをぬあはれに務とつひて教せを
いさあむむのいさうていさやいさうらうさうのせれやみ
らもあはれは務うひみあはれをむるとおぬのいされ
むよめら

寐蓮法師

八十

務うひみあはれをむるものぬのやうら川の夕晴のえ
かやあぬぬの八十氏川らわらふはぬいさ度のはあはれ
八十氏と八十氏の八十はうさうはぬいさおぬ八十氏はさう
あうとさうら川と云枕はよいひうけさうあしこのんはせ
人の晴をさうらうらうをぬあはれに務とつひて教せを
いさあむむのいさうていさやいさうらうさうのせれやみ
らもあはれは務うひみあはれをむるとおぬのいされ
むよめら

子める女が台よ

皇太后宮大夫俊成

八十一

大井川をさしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
せとさふよまのさしきりてさしきりてさしきりて
瀬とさしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて

為京守家朝臣

八十二

谷を折れり川をさしきりてさしきりてさしきりて
伊勢がうろたれ申すさしきりてさしきりてさしきりて
けうのいせが橋の屋みく
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて

る者さすの付

折政を政大臣

八十三

さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
中さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
折政を政大臣のさしきりてさしきりてさしきりて
のさしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて

式子日記

八十四

窓らうさ竹のそとにさしきりてさしきりて
納涼らん心さしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて
さしきりてさしきりてさしきりてさしきりて

けりれ河をたしり

千ふら番よりなよ

指中河玄公絶

九十三 飛もがれ庭へまぎて打ちびらこひらこぬ夕を乃実
まがらうの庭へあふりしすなびきよふは風をいしく
めらるしむらるぬハくめりさぬさし早れぬ夕
をれ涼しき京まよ

色も痛きとやせし心と積物多 源俊賴朝臣

九十四 十市よハ夕をまよ〜久それあまらぬ山をのり水け
けりハ靴の歌るれども夕をまよ積物多友へ入し十市
ハ大和の歌人名にあまれかくハ十市歌よあらし山を
あらし〜京まよ〜のハ見ぬ〜まよ〜あまれ
く山を〜水けがぬゆるやどに十市よハ夕をまよ
めてまよ〜あらんらつ〜まよ〜まよ〜まよ〜
夜月をよよたれ 次之任れ政

九十五 庭の面ハま〜らぬ夕をまよ〜はら〜むら〜月ハ

夕をの好庭の面ハ〜らぬ夕をまよ〜はら〜むら〜月ハ
ほら〜月ハ〜らぬ夕をまよ〜はら〜むら〜月ハ
ろそ〜こ〜中〜よ 式子内歌已

九十六 夕をまよ〜らぬ夕をまよ〜はら〜むら〜月ハ

あしおし〜まよ〜らぬ夕をまよ〜はら〜むら〜月ハ
ふけて鳥蝶く秋をまよ〜京まよの〜す〜はら〜むら〜月ハ
物よ〜まよ〜らぬ夕をまよ〜はら〜むら〜月ハ
らぬ夕をまよ〜はら〜むら〜月ハ

千ふら番よりなよ 又大細云ん

九十七 出つ〜所〜や〜はら〜むら〜月ハ
出つ〜所〜や〜はら〜むら〜月ハ

たもこれ比ひづるしのこゝろをいさげばさびしきも
うましく清くさうやうなる下巻く

るそくをなす時 拵政左政大臣

九六 秋らうれなるこれらうにゆく蟬の洞の房や下葉深ん
友祐とて秋らうくうて下葉のうもあわおく友祐の
下をなごあやとて秋らうくさきさこの松の蟬の志さうよ
うく強よ其洞の房や下葉をいさむるにゆくわんと
く人もつうくあけなは紅酒をささげ今時の人かさ
やうの井はなごし

二条院 讚岐

九七 蟬の房も涼しき夕暮に秋浅るる杜の下葉
秋をいさけりら秋の物く友のうらまれば秋をいさ
さくうて下葉がなごしと後さくくさくさく向くさくも
あやもあやの向くさくうてなごのまきうさくうてさく
けすれ秋をいさけりら秋をいさくさくうてさく

雲のたぐひをよとて後作る士せ忠見

百 づげらうよる雲れのたぐひをよとて後作る士せ忠見
時代ゆき友位よとてさくさくさくさくさくさくさくさく
懐のふ有る友人秋集よ前載に雲のたぐひをよとて
と向くあやのたぐひをよとてさくさくさくさくさくさく
あやをいさけりら雲のたぐひをよとてさくさくさくさく
あやをいさけりら雲のたぐひをよとてさくさくさくさく
裁のたぐひをよとてさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

みすそくをなす時 拵政左政大臣

百 雲のたぐひをよとて後作る士せ忠見
ゆきあやの向くさくうてなごのまきうさくうてさく
けすれ秋をいさけりら秋をいさくさくうてさく

石井の心をもてしめて井を伝へていづれはあつた
志のつらさはよむ井をくるとあげつればあつたおぼしき
名入玉がてしてつぐとつぐとあつたすうあつたがな
いふくあつたつぐとつぐと秋の夕暮がわがよつたわが
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

千あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

白 片枝さけあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
中うあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
らんけあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
風をあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

るそつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
前大信正意あつた

白 友交つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
友とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

延長流時月次の扇風よ 壬生忠忠筆

白 友交つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
友とあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

貴く

白 友交つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

新古今和歌集卷第九

秋歌上

歌一

中納言俊持

神多ひらみ室の山れ暮かづ〜〜〜次之を秋の歌にたり
是ハ中方なるのうし神多ひハ大和の名ふし暮ハ秋
れハ風ハ葉ふし次之〜〜〜物と申ク秋をい
ふふし葉ふしを申す〜〜〜物と申けり風とい
ふ〜〜〜次之〜〜〜云ふ〜〜〜風をいふと申す

百首にあら秋の心を 崇徳院法皇

二
い〜〜と秋の心むけの〜〜〜や秋をそ風もさゆ
秋の心むけの〜〜〜にちりて〜〜ハ倍り
る〜〜と〜〜は同じ〜〜や秋をそ秋の風もさ
てお〜〜〜秋をそ〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜

後京子道於後

こゝろぬ夜に秋を来にけり
秋の風のきよきにぬ
この秋ぬるこよひ秋を
秋の風がきよきにぬ
ぬれぬるよのちよ秋を
秋の風がきよきにぬ
きよき月もわづらぬ
秋の風がきよきにぬ
きよき月もわづらぬ
秋の風がきよきにぬ

文治六年女御入内屏風よ後徳大寺左大臣

つとむく禁入可也とあり
屏風の徳よ禁入可也とあり
つとむく禁入可也とあり
屏風の徳よ禁入可也とあり
つとむく禁入可也とあり
屏風の徳よ禁入可也とあり

さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて

寂勝曰天日院障子にさきかたはさきとて

さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて
さきかたはさきとて

るそくさうすし時

白を后まぢ文後成

ゆゑに松のうらばらうみ後せだぬる田の秋んがゆゑ
ゆゑにみづのいしや秋のいしは異なりしはゆゑにみ
して松のうらげうらみわくせむぬる田に秋んがゆゑ
ゆゑにうらをよめてゆゑにうらをよめてゆゑに
山八田にうらをよめてゆゑに

もえ流秋のよ十方よりよませゆゑに 辰京の澄秋

ゆゑに松のうらばらうみ後せだぬる田の秋んがゆゑ
ゆゑにみづのいしや秋のいしは異なりしはゆゑにみ
して松のうらげうらみわくせむぬる田に秋んがゆゑ
ゆゑにうらをよめてゆゑにうらをよめてゆゑに
山八田にうらをよめてゆゑに

ゆゑに松のうらばらうみ後せだぬる田の秋んがゆゑ
ゆゑにみづのいしや秋のいしは異なりしはゆゑにみ
して松のうらげうらみわくせむぬる田に秋んがゆゑ
ゆゑにうらをよめてゆゑにうらをよめてゆゑに
山八田にうらをよめてゆゑに

ゆゑに松のうらばらうみ後せだぬる田の秋んがゆゑ
ゆゑにみづのいしや秋のいしは異なりしはゆゑにみ
して松のうらげうらみわくせむぬる田に秋んがゆゑ
ゆゑにうらをよめてゆゑにうらをよめてゆゑに
山八田にうらをよめてゆゑに

左場つ智道具

ゆゑに松のうらばらうみ後せだぬる田の秋んがゆゑ
ゆゑにみづのいしや秋のいしは異なりしはゆゑにみ
して松のうらげうらみわくせむぬる田に秋んがゆゑ
ゆゑにうらをよめてゆゑにうらをよめてゆゑに
山八田にうらをよめてゆゑに

源具頼

ゆゑに松のうらばらうみ後せだぬる田の秋んがゆゑ
ゆゑにみづのいしや秋のいしは異なりしはゆゑにみ
して松のうらげうらみわくせむぬる田に秋んがゆゑ
ゆゑにうらをよめてゆゑにうらをよめてゆゑに
山八田にうらをよめてゆゑに

の初風が吹きやうかしくは侘人の時よとあふびと愁迷
懐多き人ハ秋ハ愁情もほくよもあふびとちか
よ潤るうらぐらもあふびとあふびのあふびしたつぬる秋ハ
凡が抱のうらぐらとあふびとあふびとあふびとあふびと
云々一返了れ況し 切紙

秋の初風

水さみれあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
かや言今千早振神のいまよいよあふびとあふびとあふびと
けんをこりてあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
うらぐらうらぐらうらぐらうらぐらうらぐらうらぐらうらぐら

秋の初風

秋の初風はあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
夕暮のあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
よもあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと

わにとあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと

あふびとあふびとあふびとあふびとあふびと

このあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
このあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
ハあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
てあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
このあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと

あふびとあふびとあふびとあふびとあふびと

秋の初風はあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
此のあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
秋の初風はあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
位もあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
ハ秋の初風はあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと
侘人ハあふびとあふびとあふびとあふびとあふびと

に向くは田原を田原に秋をいつくさるは秋の味
うら秋をいつくさるは田原のふたれは秋にうらと云
るをまづげしうらふなれうらふもわらうと云
めし

ふい〜〜ん

申務つ具を叙し

・
夕暮るの秋吹をこれをもとまらふをいつくさるは秋の味
うら秋をいつくさるは田原のふたれは秋にうらと云
るをまづげしうらふなれうらふもわらうと云
めし

好徳ちあらたは

・
夕暮るの秋吹をこれをもとまらふをいつくさるは秋の味
うら秋をいつくさるは田原のふたれは秋にうらと云
るをまづげしうらふなれうらふもわらうと云
めし

うひてさるは秋を風がさる物中て人よわがうらと云
をいつくさるは秋を風がさる物中て人よわがうらと云
をいつくさるは秋を風がさる物中て人よわがうらと云
をいつくさるは秋を風がさる物中て人よわがうらと云

七条院よりうらふ時 皇太后も大文後成

・
秋も秋ありてや秋風の香はうらむる妻とあうら
おのうらと妻とあうらむる妻とあうらむる妻とあうら
人の妻とあうらむる妻とあうらむる妻とあうらむる妻とあうら
そいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこ
又いれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこ
もいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこいれぬこ
の香はうらむる妻とあうらむる妻とあうらむる妻とあうらむる妻とあうら

歌〜〜ん

七条院よりうらむ

四七 セタれと後々舟はらばれにいく秋うさるるあつたつさ

セタよの向ふのいもれにさくあつとさうりあつとさうりて
のくに書てよ向ふと後々舟はらばれとさうりけり年よ一
夜うれども身秋うの向のむつさと書てよ向ふとさうり

る方方申す 式子内祝

四八 るうむれは衣の涼くさつたの天の河京乃あまれタタ
これらふうくせしうしけあ秀逸のうく内し

家よるそいふよみ行る時 入るる国心を政大臣

四九 づむうりいとおめんセタ乃妻結方あまれ川を
人のうさもさういとなのそて行時いおもさうらぶ風も
あよしむさうにさゆるとのこしよひセタの妻行らひな
れが天の川風ふうけり身よとめんとあひひやう
らううさう

セタのいんし 後申池て云

四 ぽいあひの夕涼き天河をふの橋をさうりて秋うせ
おふの橋をさうりても後後有事く芳いおふの橋
あつさの橋ともいもさうらぶらうりて
ともよ通つてさうりてさうりて
のちとせさうりておふ橋中流

天の川をふの橋をさうりてさうりて
天の川をさうりてさうりてさうりて
切成あまらる

新関門院埴川

四一 セタれあせはせぬ天川づうれ秋うわさるるあらん
セタハまれあつ申しとさうりてあつたあつたあつた
いりうさる秋天河をさうりてさうりてさうりて
く後せぬをさうりてあつたあつたあつた

女流徽子女

四二 わらわはあまの河波よりうらむる水にいまもせせむ

わらわはあまの河波よりうらむる水にいまもせせむ
わらわはあまの河波よりうらむる水にいまもせせむ
わらわはあまの河波よりうらむる水にいまもせせむ
わらわはあまの河波よりうらむる水にいまもせせむ
わらわはあまの河波よりうらむる水にいまもせせむ

大中は純宣の詩

四三 夕ぐれにひびきしそらにの神よあはれむ心あ

朗詠 菅家 露應別泪玉空落雲是残粧髻未成
夕ぐれにひびきしそらにの神よあはれむ心あ
夕ぐれにひびきしそらにの神よあはれむ心あ
夕ぐれにひびきしそらにの神よあはれむ心あ
夕ぐれにひびきしそらにの神よあはれむ心あ

中納言急須の房はよ 紀書し

四四 織女とやわらわくたはらうらむる水にいまもせせむ

堀川渡流時万葉集に秋をいづる

前中納言巨房

四五 河水よ麻人のつらき秋の心

河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心
河水よ麻人のつらき秋の心

後之佐礼政

四六 夕ぐれにひびきしそらにの神よあはれむ心あ

つゝ萩のふじつとてさういふ人ごらまげましとらけり又万葉
よ我衣をいししれろよとあつたまのゆくゆゑ
萩のふじつとてさういふ人ごらまげましとらけり
さぬよさういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり

竹信正永後

四七 萩萩をいふでいふ月夜のふじつとてさういふ人ごらまげましとらけり
月夜ハ萩をいふでいふ月夜のふじつとてさういふ人ごらまげましとらけり
地しとてさういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり

守るは萩をいふでいふ月夜のふじつとてさういふ人ごらまげましとらけり

四八 萩のふじつとてさういふ人ごらまげましとらけり

万葉はま人の神つとて萩萩のふじつとてさういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり

神子内萩のふじつ

四五 さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり
さういふ人ごらまげましとらけり

人唐名

五十

秋萩代後らるゆきこの夕暮るよぬれつら白せ表の文ねて
暁よりからるはれを夕暮るよぬれつら白せ表の文ねて
うらぐら夜をわたりぬらむとてまかせとめらし

中納言持

五十一

さかしく秋萩らおの秋萩よむとみりまてをらるる
庵の朝たららるふのこもむしみこまのあたるまれ
凡情流るくあててるら

凡河内躬恒

五十二

秋の沖瓜ふりまに物つて我衣のハ花らまらるる
うらむらるるきふの香ハ花のあのみ

小中少町

五十三

まつらふ紀のふらるる 秋のあつらふ
あつらふ紀のふらるる 秋のあつらふ

若菜え直

五十四

女帯心沖きこるぬつおひ出てせりしまら勢やあつら
女ハ物懸のほろおひとせりしまら勢やあつら
かの女帯心沖きこるぬつおひ出てせりしまら勢やあつら
歌して清くうらけのほろおひとせりしまら勢やあつら
とていそやうしまら勢やあつらとて清くうらけのほろおひとせりし
まら勢やあつらとて清くうらけのほろおひとせりし

千あるま女うらなよ

左色中納言持

五十五

夕暮れはむらるゆきこの夕暮るよぬれつら白せ表の文ねて
女の夕暮れはむらるゆきこの夕暮るよぬれつら白せ表の文ねて
まらむらるゆきこの夕暮るよぬれつら白せ表の文ねて
物にむらるゆきこの夕暮るよぬれつら白せ表の文ねて
あつらふとせりしまら勢やあつらとて清くうらけのほろおひとせりし

うらけて中を人の千種をしんかふよるすしともしぬ
あつさも秋の威に得られし心のきりつくる
まよふに心ほくしとらるる宜しといふ人々
し河去るも流雲よ行るとらるとちる人なり
とハ我と我を起さると云又何事なくも我を起
のさうとあつたあつたついにあつたてきこまむ
くさうさうさうし人なりとらるとらると云い

あゝ〜〜

あゝ好む

六十一 舟をりて人々をのりて後よ板よりあつたうけぬ
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう
夜ぬらうさうさうさうさうさうさうさうさう
よさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あゝ〜

六十二 山をりて人々をのりて後よ板よりあつたうけぬ
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう
夜ぬらうさうさうさうさうさうさうさうさう
よさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あゝ〜

六十三 うらけて中を人の千種をしんかふよるすしともしぬ
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう
夜ぬらうさうさうさうさうさうさうさうさう
よさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あゝ〜

六十四 さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう
夜ぬらうさうさうさうさうさうさうさうさう
よさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あつたうけぬとて早くとちむとちむと夜ぬらう
よもさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さきさきうらめしき毒もわが尾ふの面もく爪は
えんふもくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
人とんれをくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
めいさくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
四月あり

よみ人しうし

六四

小倉の井戸の水をすてはたふらにゆくわが爪を
少倉の井戸の水をすてはたふらにゆくわが爪を
ふしわが爪をすてはたふらにゆくわが爪を
ふしわが爪をすてはたふらにゆくわが爪を
ふしわが爪をすてはたふらにゆくわが爪を
ふしわが爪をすてはたふらにゆくわが爪を
ふしわが爪をすてはたふらにゆくわが爪を

女流徴子日記

たすふ 不のうめも爪で少倉の井戸の水をすてはたふらにゆくわが爪を

あのうらめしき毒もわが尾ふの面もく爪は
えんふもくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
人とんれをくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
めいさくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
四月あり

るそしうし

或子の日記

たすふ 不のうめも爪で少倉の井戸の水をすてはたふらにゆくわが爪を
あのうらめしき毒もわが尾ふの面もく爪は
えんふもくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
人とんれをくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
めいさくしうしうしうのやれ爪も糸と我の
四月あり

攝政左大臣家なる言後も竹生に 八条院六條

六十七

仲もこぬまきつゆさる秋風をいぢまらびくふ所は
秋風がふもいぢまらびくあの中へまこの中へにも言はれ
はるよふ所をいぢまらびくはるにもいぢくこはる
よふまらびくして後さし 秋風をいぢまらびく

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

六十八

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

六十九

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

七十

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

七十一

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條
秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

秋風よふ所は言後も竹生に 八条院六條

是れをくれば神に潤ふ事かこみたる秋の感懐乃
派なきをいれと凌定くしてとありんかあるはし
・家よりそし可名し得るま

七六 物心つてかた秋意やと神よあけ候てけりれ秋入夕暮
候るとしやと物ましく人のさき多くんよおつひのあつ時
ハやましくら孫まおしきのんれ我神ゆあめぬれ候
おしあつらましくして我れけおつよしとまらにとおひ
でようこれどくちるあつ神よあけくわいさるまゆで
とこがめてあつとくち秋入夕暮れ感懐よ候とれ
て候てけりましくとましく

ふろこども候をし候てとくに名候しよ山路秋意
とつよふとましく
ふろ信心慈愛

七十七 山路やいつより秋入をあらんまきりしもの夕暮れ候

山ハ春は不變ま候しき物しとつるまはるよみぢ
アしやしるまきりてハつらう秋のまあらんま
表一毎アれんましく
切紙あり

ふい〜ん
寂蓮法師

七八 淋さるとるましくもたつらうまあらん秋の夕暮
候と山にあらおしとびしさばのま文字さびし
とつあめのかしうれましくあらひハぬれよつり又ハ
まのらうりかたられあらましくあつとましくあつて
淋しきれあつあつにましくあつとましくあつて
とつ山に秋入夕暮の宗實つらふとよあり
切紙あり

西行法師

七十九 心ち此身にもあつれとあつ候とつらう秋の夕暮
おりの候あつし早下して候とつらう道世のま

ふにいつらあつて申さずして我んよとひてこれに秋の威
情にふせしとてさうさあつて固の考くとも
ふしうさあつてと云ふは秋の考をいふ心こめり
物さしのと文字よりこころはあつてあつてあつて

野々明

秋風のひらひらしてぬ神にあじして我々の考の又々を
かうまはれこのひらひらしてぬ神にあじして我々の考の又々を
けうまはれこのひらひらしてぬ神にあじして我々の考の又々を
かちもこのひらひらしてぬ神にあじして我々の考の又々を
てわらぬ神にあじしてぬ神にあじして我々の考の又々を
もうらぬひらひらしてぬ神にあじして我々の考の又々を
らぬ神にあじしてぬ神にあじして我々の考の又々を
て我々の考の又々をぬ神にあじして我々の考の又々を
れはぬとてぬ神にあじして我々の考の又々を
神にあじしてぬ神にあじして我々の考の又々を

らうしてよめぬ神のひらひらしてぬ神にあじして我々の考の又々を
申さしとてぬ神にあじして我々の考の又々を

おり流師

八五 おほつる秋といふ秋のあれがむらよ物のうさあつて
むらよのうさあつてぬ神にあじして我々の考の又々を
つらなとてぬ神にあじして我々の考の又々を
てぬ神にあじして我々の考の又々を
いうさあつてぬ神にあじして我々の考の又々を
らうしてぬ神にあじして我々の考の又々を

或子内教

八五 それをわづらふあつてぬ神にあじして我々の考の又々を
それらわづらふあつてぬ神にあじして我々の考の又々を
考といふ人がらうしてぬ神にあじして我々の考の又々を

らぬ秋をぞう芳と人かちがひてつらきいふも人も
芳れ人なむに我身年あひあきく芳ハ秋とそもこの
感懐もふくむにさうしにいまハ秋の感懐とられを
引いていとおおめいよなうめをいふとけくもそ
いなりとていふにう流うし 切紙あり

ふい〜い

長原長純

十六 月づきのつらきをぞうのうけらむもつらきせぬいふは
長純と名のうしと人ハ血氣もかともくおめい感懐を
引いていとおおめいよなうめをいふとけくもそ
いなりとていふにう流うし 切紙あり

和泉式部

十七 秋はれはさうハれ山の松れも移る中に身もぞ〜みら
し〜のふと守時不妻のられをし秋ハは時の内よま

もかとうやうの時をいふてまづもさうし移る物し不妻の山
なれも秋はれはこと松も不妻れとのなうにそ不妻
の山は不妻のれよ吹風もさうくうらなうてあつれ
ま〜くさるし身もぞ〜みらとあらそをさいふに
あつれ秋はれはさう〜のふと守時不妻のられをし

るる秋好ゆ

十八 秋はれはさうハれ山の松れも移る中に身もぞ〜みら
し〜のふと守時不妻のられをし秋ハは時の内よま
もかとうやうの時をいふてまづもさうし移る物し不妻の山
なれも秋はれはこと松も不妻れとのなうにそ不妻
の山は不妻のれよ吹風もさうくうらなうてあつれ
ま〜くさるし身もぞ〜みらとあらそをさいふに
あつれ秋はれはさう〜のふと守時不妻のられをし

おぼ

十九 曉人なむ洞もさうまうでう〜むる風ハ秋をそのれれ

あつらひゆく秋のそよもきよきとよめく

式子ゆ歌

九十七 詠 月夜に宿もぐれけりも山も月やまはらん
三千客れら秋のふとあはれし山にも月をむむれ
は何方のゆれりとも秋のふとあはれし山にも月をむむれ
を秋のふとあはれし山にも月をむむれ 切底方

あゝいゝい

系融院御三可

九十八 月新入初秋のそよもきよきとよめく
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の

系融院御三可

九十九 月新入初秋のそよもきよきとよめく
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の

是八月と初秋のそよもきよきとよめく
がそそれがあの山もあつらひゆく秋のそよもきよきとよめく
うとあつらひゆく秋のそよもきよきとよめく
切底方
系融院御三可

百 女新入初秋のそよもきよきとよめく
磯城の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の

系融院御三可

百一 女新入初秋のそよもきよきとよめく
今よりも心もあつらひゆく秋のそよもきよきとよめく
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の
月新の初とけり物しれも初秋の月も凡も初秋の

何人々も暮もせで涼山月月よ叶もあれ秋風がききて
秋の感懐も秋涼も身よしめ候てわかれまゝとて
のまゝし

八月十五夜和雨言合よ涼山月とよとて

涼のぬれ山の房の秋風たにさぞ秋のま月ハ淋
けりれさぞれはうきすれんし中言合なり 木のらう
かうらる月の秋風れんづり秋のま月よりとぞう
木のらうらうらうらう月も秋ハ涼風よお氣なる物し
涼のぬれ山と福山の海き山しその山も秋風あがよ
るるす木のられ月いさびしにすてけ涼山月木のら
うらうらうらう月も秋風よその山の感懐を秋の
かきすしとていづりてわかれまゝとて

月前松風

寄蓮法師

百十三 月ハ秋のぬれ山も福山の海き山しその山も秋風あがよるるす木のられ月いさびしにすてけ涼山月木のらうらうらう月も秋風よその山の感懐を秋のかきすしとていづりてわかれまゝとて

一通り笑へらうとて

切紙あり

鴨長明

百十四 秋風がきしに物さ月よ又我身むとのん秋れ松風
か前月もれがきしに物さ月よ又我身むとのん秋れ松風
福と幸言れんは月ハ必去美人のら物さ月よ又我
もさぞわらんちれどもわが月とこれハあじよわらうし我
身はとらの秋風すにさぞ我身一つの秋とわらう松ども
と云か言のまゝし
その心を月よ對て世中此を我身身の雪裏迷信
らよおきこふよ又家の松風が秋のわつれをさして
吹流るま月といはれれといはれ秋身のられ秋のら
さしと中言の我身のら秋よわらう松どもと云と
ちいさなる言し 長竹の中なる雪のうらまゝし

山月とよとて秋よみ候る

後京秀純

百十六 里引乃山流の暮れ冬の上は秋の夜を思ふ月と云ふは

旅より言きて山流の暮れ冬の上は秋の夜を思ふ月と云ふは
秋の夜を思ふ月と云ふは秋の夜を思ふ月と云ふは
秋の夜を思ふ月と云ふは秋の夜を思ふ月と云ふは

八月十五夜和言ふれ前夜に海邊秋月と云ふと 宮内

百十六 心あれ御酒のあまら夜は月やれぬはねおとす禁を
おとす禁を
おとす禁を
おとす禁を

宣秋門院丹後

百十七 乳粥波の秋の夜は月と云ふは月と云ふは月と云ふは

いと云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは
いと云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは
いと云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは

鴨也明

百十八 春の夜は月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは
春の夜は月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは
春の夜は月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは

七条院大納言

百十九 心と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは
心と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは
心と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは月と云ふは

白丸 立田山夜半にあじし松あけをせよふと松の月影

松を松のかけをこころて言わぬ物もハ松の次でも言わぬ
さ物し 立田山夜半に松の松よびうりつちをいさよと
てをいさよぬ物ゆきよハ松の次でもちれ松も松を
かかけをさうりつちいしをよハ松の月影がうとくあつて
あつてうよつてはうりつちハ不妻らる物ゆき松ハ言して次
ともちびる指の月よさうりつちハ日どるゆしてうて松の松
かけをせよハうとく月影あつて松を松のかけぬ時
日どるさうりつちをいさよと

景徳院より言はるに 左京大夫松尾

白十 秋風よぬれひくも松のらうりつちわれぬ月影のちやけさ
もつれつれてたきいし横がらゆ月影が下ふにあつて
うつ松をさうりつちひくも松のらうりつちわれぬ月影のち
さやけさたきいし横がらゆ月影が下ふにあつて

うささうりつちひくも松のらうりつちわれぬ月影のちやけさ
ん物をもさうりつちひくも松のらうりつちわれぬ月影のち
けうもよのらうりつちひくも松のらうりつちわれぬ月影のち
まよるりつちひくも松のらうりつちわれぬ月影のち

いーいーいー 道同法師

白一 月のくにをいさよつちまハあつても月の松をこれら
月ののうりつちもせれよこころりつちのちやけ月影
うりつちと後うりつちも月の松をいさよつちま

殷富門院大輔

白三 詠けおめよぬれつちいさよつちまハあつても月の松をこれら
詠つて幸甚あつても月の松をいさよつちまハあつても月の松を
うりつちと後うりつちも月の松をいさよつちまハあつても月の松を
てらるる松をいさよつちまハあつても月の松をいさよつちま

或子の秋

白三

身はらふらても秋ぬごき月あつたのくしうさおかおまじ
さてもかさありてもし身はらの月もる白きひんぎを
ぐく極まよふりてとや山のくしうく入方にうら
ゆ月と行むおひいんもあつた身はられる白きさ
あつてとひひをそく秋てあつた今も秋月を行むさ
おひひとせむしきよと云ふし

白四

又る處で秋れどこそう秋にひもいれど秋の夜も月
月をいもして秋のくしうを秋れどこそ入方と行むさ
かろく秋月をいもひいとれどくしうをいもひいれどか
ろくしうをいもひいと月をいもひいれどくしうをいもひいれど

今そしう時

折政右政大臣

身はらふらても秋ぬごき月あつたのくしうさおかおまじ

身のららふれびくをう月もるさうくさうかあつたふんぎ
いく秋れうしひんぎをうも秋らげさうさうさうさうさうさ
月もさうか秋れをいもて秋もいもけ秋らび
て心もまよふ秋の月とて秋もいも秋れをいもつたひ
かのよさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
家よ月もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

白六

月もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
は時の内秋をいもひいと秋の夜もいも秋もいも秋もいも
るは秋の夜もいもひいと秋の夜もいも秋もいも秋もいも
は時の内秋をいもひいと秋の夜もいも秋もいも秋もいも
のをいもさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
をいも秋もいもさうさうさうさうさうさうさうさうさ
うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
よさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ
に月もさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさ

歌

右場へ替は具

白四

秋の夜もやどろく月もまなびの神よ吹らば秋の土風
やどろくハ鳥よやどろし秋の土にまなびの鳥よ月もまな
て来りまなびの鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
新成もまなびの神よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
よめりし

源家也

白三

秋の月もよるの秋にけてとてとて京よまなびにけり
志のまなびの鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
月の秋にけてとてとて京よまなびの鳥よ吹らば秋の土に
え久元年八月十夜秋にけてとてとて京よまなびにけり

新成政大臣

白三

風流の山田の鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
秋にけてとてとて京よまなびの鳥よ吹らば秋の土にまな
か

か月、月のありと人乃ありととてとて京よまなびにけり
秋の土にまなびの鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
志のまなびの鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
月の秋にけてとてとて京よまなびの鳥よ吹らば秋の土に
え久元年八月十夜秋にけてとてとて京よまなびにけり

秋にけてとてとて京よまなびにけり

白四

秋の鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
小田の鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
とてとて京よまなびの鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ
よめりし

白を唇まを又後成女

白五

秋の鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
小田の鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ月もま
とてとて京よまなびの鳥よ吹らば秋の土にまなびの鳥よ
よめりし

よめりし

白四六 あくろきて 祢ねの 蒼へは けりまで 月よそふ ぬ海は びら
月とえんとして 夜夜もく あくがれ ちる我宿の 座よら
塵のつらさ 月よそふ ぬと 月よそふ ぬねや ちり

大申 臣定雄

白四七

秋の 田の 色も しの 床乃いれ けり 月や せも 志なる ちり
うり 田よ 稲をいりて けり けり けり けり けり けり けり けり
むらと 云り けり けり けり けり けり けり けり けり けり
むらと 云り けり けり けり けり けり けり けり けり けり
ちり けり けり けり けり けり けり けり けり けり
ちり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

宗法院御時 ちり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

白四八

秋の 田よい けり けり けり けり けり けり けり けり けり
い けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり

けり けり けり けり けり けり けり けり けり

ちり けり けり けり けり けり けり けり けり けり

白四九

秋の 色い けり けり けり けり けり けり けり けり けり
秋の 末れ けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり

秋乃い けり けり けり けり けり けり けり けり けり

白五〇

秋の 色や 袂よい けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり けり けり

子あつるあつる名

丸清の智道先

白五十一

文より又冬とよめめとめより月つらき秋の夜
名前の月におおきくおとすよめとつらき秋の夜
もさななしいらねと有めの月におとす秋の夜
る地しこの心月減行しててはまりくかめさぞか
かぎりありて明らなればさびたのめとよやま
けらる月つらき秋の夜明ら月つらき秋の夜
つらき秋の夜月つらき秋の夜

源房の守名に曉月の心減行 二条院借波

白五十二

秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜

みすそいふ時

源房の智道先

白五十三

拂ひの心つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜
つらき秋の夜つらき秋の夜つらき秋の夜

秋ア四十四は音前読り女子事入

中初と兼浦家屏風よ

紀事

織女ハやがり天河ハまきりこらく千ちりり形々
兼浦ハおハる東東極より先ハ天河ハ吾たらはる
幽々として暮らる情とくくう暗の事気あり一
れを吾河ハ吾たら幽々暗の七夕のやうあは
りあくくう人々情をなり

新古今和歌集卷第六

秋の下

和歌のよきものことなる後傳に夕麻とよことと

後東家陸朝臣

白辛四 下おふらり山の夕何ぬれてやひりる若乃あそん

昔秋のよきしおふらりも昔秋よむかどは夜にまろく下
まてきししうちらハ一ふふをけくそりくさちるは時
昔何おのゆる夕系云秋よ以て感情ちるに麻の音
のむがふしハ麻も秋乃夕系ハ感情ちるにつれら
をこひてひとり何よぬれて情と人と秋ハ感情
まはるこころし秋下そはまはるうまはるがた
そのよハあつさるしぬれてやひとり割の河し

るそくう時

入る右大臣

山がりしに麻の音なく夕のうら尾よ骨ばたや文か
 山麻の音なく夕のうら尾よ骨ばたや文か
 のこぼるるまきりし尾よ月よよがあげけり
 こして麻の音もきくまゆると後り
 切底力

寂蓮法師

野がびりとの葉がわねて、海山よ流さこが声
 けいけい人室らうねらうきせくけいゆめで花よりく麻
 の音をいさるにせらりゆのら麻の音もきくまゆると後り
 下もあれそそるゆよ海山よ流さこが声
 く葉の音がきくと後り

ふい〜い

後慈法師

あしゆめくまが京よ竹麻の根くろくやままとて
 くまが京よ竹麻の根くろくやままとて
 京よ麻がわねてをきくと後り
 云しその下よく麻の音のくろくやままとて
 まをこい根てくろくやままとて後り

兼中納言后房

まよ麻の音なく夕のうら尾よ骨ばたや文か
 まよ麻の音なく夕のうら尾よ骨ばたや文か
 のこぼるるまきりし尾よ月よよがあげけり
 こして麻の音もきくまゆると後り
 切底力

歌志るい

あきま法師

砂の尾上いそる葉の音なく夕のうら尾よ骨ばたや文か
 砂の尾上いそる葉の音なく夕のうら尾よ骨ばたや文か
 のこぼるるまきりし尾よ月よよがあげけり
 こして麻の音もきくまゆると後り
 切底力

下のおしと袖がゆきし後ししとのおもひもつたけの
手撫し

・る首をすり時秋のう 惟明、親己

百六十 涼山をいし雲乃栲をいほさうる嵐よどいさかき色
ほゆるこの嵐よ麻乃勢がつりし松乃栲をいりりて
すゆさし形乃有也とてしもまに栲をいほすと後
ゆえのり撫し 嵐よどいさかき

く 晩中、麻としりて瓜後作し 去流つ門ちけ

百六十一 我らぬ人とも衣やゆさるん麻るく山乃秋のゆくれ
麻の妻をいしひて秋の夕暮の山よゆ瓜さけを我中
け風情もくくして衣もゆさるるにおもひし威情は
我をうりあていあるまどおの人ともゆづめて衣やゆさ
るん是よ撫るとのいあしとゆさるし
るゆしう後作りる小 振政を政大け

百六十二 もぐく、松の嵐やゆゆんを上にうらさかーの声
尾よりして松の嵐が麻乃勢をいさるゆれが只
まえよゆさるいゆさるにゆさるるが嵐がゆゆしとん
えて尾より方に麻の勢がゆゆれとゆゆしなぐ
あるはささゆいゆさるしゆゆいさるしにさるし

千もろもろのなよ ぶ大信正意家

百六十三 吟麻の勢にめ受て思ふゆとそめ受て秋の勢をい
た今命もゆさるて行くある物いえ果ぬ若のささるしり
け方の目をささるて後さし 吟麻の勢よめと受て
若うさるひり友又いさるし人を此麻をゆさるとそ友よ
こそまらそのとゆいさるゆらに麻の勢にめ受てま
よ秋のこひをささるて若の名妙と思ふとゆいさる

家にうなをるに麻とよめ 持中納言俊忠

百六十四 終夜まると麻乃ゆくれはよ小秋が京北をさるる

あつちよふあつちよふにさくゆふと回しよすすあまこ
か若めなうくまはあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ

あつちよふ

源乃海

白六五 寝笑して久くあぬ秋乃夜ハ明ヤ志ゆん麻をゆふ
秋の夜ももきに寝えぬあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
麻のちくちくあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
切底

西行法師

白六六 小山田の庭わくは麻の言にをるるあつちよふあつちよふあつちよふ
小山田の庭わくは麻の言にをるるあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ

あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ

白川院を羽よかすはらるに田家秋興とて
ことごとくあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ

白六七 白川院をねの田中に飯をゆふあつちよふあつちよふあつちよふ
白川院をねの田中に飯をゆふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ

白六八 郁芳門院兼裁合にまゆらる 兼京の院下
郁芳門院兼裁合にまゆらる 兼京の院下
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ
あつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふあつちよふ

新裁合とよを尾毛のりやうてこ裁めはるのれ
くくくの秋のまよををい歌して言合はる裁合
よこのの心をよもをのる麻もまををいひてはれて
あつてよ小せの昔京の風よ吹くはあつてよあつて
さうはつれうてよもはかろこひはまをいひてはる風
情のかるおしつ陽気やいとさびしきと入麻のひ
とつと縁とよ説あれとよつと不がるもい

たいしつ

後巻に師

百六十九 立田山本どをまづに如まにゆくも麻のそよくれはる
立田山とよを文字のりのみ文字よて下句とことい
ようてよみ文字
かやあま山よみはらうとわけつて若のえさつてけそ秋かま
けうをいしてよもどうふやうに二五うあてはんとどく
わらうてんもよとよとんゆかし 今の心を柄まづよ
あまよふとあつハ一節うたのりにあつは秋かくうり目よ

そいて立田山の抄麻のねうり紅糸ぶらうて麻のうら
うげもまきゆひひやよあくほくそらう入るといそく
と麻をまじひめてよまををいけわくおしそれ
そらぐしよしけいよハあきさぎのひそてゆくも麻
のそよくあつてさうあてあれんはけらるはよ用は
後巻に師 秀逸のうれ申あてこよあめのうい

秋子の親に家言合れ存麻のう積作らるよ

持大納言も家

白七十 してり秋人形人にさおーうれかのう柄柄もあくとまきん
秋の系よりうてせめて秋のうみよ麻入声をいさるぬりく
こよ麻も秋は行しむりのゆくのあがきまでも柄
こてうらぬあてあつ人形人とこ上麻の言もまれのうと

折政を政えはるまけるそ言合よ 又傍心並美

百七十一 わらわなど唐神のそらうんいなをいばる秋乃風うハ

秋の田をいぢるもの身にちうて積しうしうぢれて
うう唐は田代ちうもの袖のちうちしてそらうにして
あん秋の風はちうてのそらよは吹地ちうにいらをよ
アア秋の風はちうてのそらよは吹地ちうにいらをよ
よめうし

あゝ〜

よめ人〜

百七十二 秋田とらりいそつて我がそれを衣ひさし〜

秋の田をいぢるもの身にちうて積しうしうぢれて
うう唐は田代ちうもの袖のちうちしてそらうにして
あん秋の風はちうてのそらよは吹地ちうにいらをよ
アア秋の風はちうてのそらよは吹地ちうにいらをよ
よめうし

前中納言〜

百七十三 秋くれがけの風のよとま〜

初秋はすし〜
と引ま〜
風はま〜
ことばよめる〜

若狭の政経長

百七十四 秋のついでにちうて〜

秋のついでにちうて〜
秋のついでにちうて〜
秋のついでにちうて〜
秋のついでにちうて〜

中納言持

百七十五 秋のついでにちうて〜

秋のついでにちうて〜
秋のついでにちうて〜
秋のついでにちうて〜
秋のついでにちうて〜

人麻呂

白七六 秋あきは房ふらうのおおははももおお少すくしてしてここととよよれれけけももととおおれれ

秋あきはこれこれはけけ字じくく秋あきはこことと同どうふふくくののふふににけけ

白七七 ささかか一いち年ねんままととふふ山さんををささぶぶららふふ山さん田たかかししああいいととささ

甲稻田かほのたハ初秋はつあきのははううももここのの穂ほももななががささ物ものくく早はやく
ももかかりり又またちち中なか秋あきのははここももああわわ物ものししののふふににののああぶぶららふふ
子こ稻い田たハはちちももななががささぶぶららふふ山さん田たかかししああいいととささ
ととししててままよよふふああれれががままををいいととああいいををいいかかりりあありりてて
言こと秋あきのの言ことああくくははここもも麻あしののここううははけけささ田たををああららわわししとと
よよここささららののここささららしし

費たか之ち

白七八 ううそそももむむれれ山さん田たれれいい糸いととと袖そでひひちちりりててくくささららみみたたととささ

山さん田たのの稲いねををいいううててちちねねををいいれれがが穂ほももくくあありりてて月つき
神かみををいいぬぬししててささらら苗えいををいい極ごくららががよよ苗えいががかかららどどににああららわわるる

おおとといいととううななはは時ときののささややううアアててるるれれららぬぬ糸いとととささ
ららししとといいよよううささららしし

費たか別べつをを段だんちちはは長なが

白七九 ささああふふよよハハむむととみみええききわわびび人ひとのの袖そで乃の洞どうのの秋あき乃の一いちととささ

けけほほいいててののししんんののつつここししままよよととむむととよよととささハハむむここみみてて
ここささハハいいくくんんととももううぐぐささししととささららるるががびび人ひとのの袖そでよよとと
ととささハハ神かみのの洞どうののややれれ秋あきのの白しろききををとと後あとののいいとと洞どう
のの乃の字じハハむむととささららしし

申まを細ことと家か打うち

白八十 家か名なのの尾おををがが束たばにに一いち房ぶらうのの割わり目めととううでで秋あきもも少すくく

尾おはは友とものの束たばよりより初はつ秋あきつつけけててちちななびびくくおおここししれれよよ
家かももああららむむ秋あきももととちち知ち秋あきのの糸いと氣き切きりるる一いち房ぶらうがが目め秋あき
ああららままににいいははハハ尾おををももととちち一いち房ぶらうももああららまま秋あきもも
いいげげくくささららとといいぬぬしし白しろ房ぶらうのの目めととううでで秋あきもも
一いち房ぶらうははほほををつつががいいははハハ断つぎびびもも也なり一いちくくううささららしし

とらるる道とてぬきてふたの心ありのりてらふこととて
ゆきよしとてもそそたのまきかともうさうさうぬくよ
とてとて心のまにさうあくとよあふし

白川院山てすまふ湯とてふん紙おれこもか
まふりりつよ 孫右大臣長忠

息十六 秋のすけふふをうてうてうてあはれしや人のぶねりえ

とてうてをうてうてうて 神とあの中らるるさたつ
ぬるらんえげさあはれしや人のこころゆくらんとて
ろそくうてうて 寂蓮法師

息十七 地ふ神うてあやうひん秋風かけが孫ぬものとは

息とる人の人よわうてを秋風吹とてあはれしや
おれい神とてうてうて神の洞はあはれしや
と秋風あはれぬぬのあはれしや我おれしや神とてあや

うらひんとてうてうて 此うてうてうてうて
心のあはれしやうてうてうてうてうて
あはれしやうてうてうてうてうて

秋うて申よ ちと天鳥

息十八 春の神よおれしははさざれあはれしやうてうて

物あはれしやうてうてうてうてうて
秋うてうてうてうてうてうて

息十九 神のすけふふをうてうてうてあはれしやうて

秋風のすけふふをうてうてうてうて
とてうてうてうてうてうて
とてうてうてうてうてうて

ふいふふ 西行法師

息二十 春の神よおれしははさざれあはれしやうて

長月すけはみちるる此のすけりぐも八床わうくゆぬし初
のちど八床より多の管しりしが秋のけきまにちるまに
舟に一夜くまぬれて床とさきまられもきばうゆくとさう
そのちとわれもよめりしうるまふとさよよとさよ
一夜くよのちりさよよりさよさうゆくとさよをさる
ひさめりまのすけりも月賀うにせせらうし

守元法親已家ふまし家中に 友京と友隆の法

白九十一 忠入もつうよはうぬれつよはれしひそふまつ風ぞめく
源が相違美よ文衣のそふひしらの源氏の君いふおんきん
とま命めつうふされるよ文衣の母志と命め文衣のふと物
しりけさく後しうに終末れ勢のさうとてててももさ夜お
うばあ洞外 終末のさうにともむすこのろ字し ちれい文入り
けさをいとうてこててに終とひよといわがししにほの君と
ふらさよわらおわもあれしとさうとて退本もさうとてさう
に終一候とひひしとさうねれが吹とよさるさうとてさう

るそいの中し

式子門親

白九十二

秋もなればたふ海芽ふむしやがれ家の底ある松虫の声
とひる人のあともさるる底の海芽に松虫のむねがれわて
あのおそくに遠よりくさぬし 切紙あり

きしひし

友京物尹親

白九十三

秋風ハ身ありむばう吹よさうやうらんいしがさごらも
旅よちて右に心ひかりて終るうし朗詠誰家思婦
博衣月昔風凄砧杵悲 此詩をを能やえらうし

新大信心巻

白九十四

衣うのちハ枕よむさうくやうしあそくよれこし
衣うのちハ枕よむさうくとんてゆらふの君をしんあふ
わげりよ衣うのちハ枕よむさうくとんてゆらふの君をしんあふ
いしてやいひていしよさうくやうしあそくよれこし

アノにとどめし外ハ

掛衣をよみ侍まれ

大納言経信人

白九十九

夜ふりつとふりややしの元よも清てけぐらん
居のききそら比ハ風もアやうにうて夜をいづつおん旅
好の人れ少きとよそ夜をいづつおれ居をいづて今
夜にほて衣をいぢとよそとけけうやぶの元も
清てけぐらんよそわんとよそわん

中納言兼胸家屏風前 貴人

二百

居清てゆく風きも居衣を清てゆくよそぬも
居衣をいづつにうめけけをいづつにうめけけと
やまをいづつにうめけけをいづつにうめけけと
ゆきそらぬもいづつにうめけけをいづつにうめけけと
清てゆくよそわんぬもいづつにうめけけをいづつにうめけけと
掛衣の心を

後京新経

二百一

みづろ山に秋風さ夜ふりつとふりややしの元よも清てけぐらん
居のききそら比ハ風もアやうにうて夜をいづつおん旅
好の人れ少きとよそ夜をいづつおれ居をいづて今
夜にほて衣をいぢとよそとけけうやぶの元も
清てけぐらんよそわんとよそわん

式子内親王

二百二

みづろ山に秋風さ夜ふりつとふりややしの元よも清てけぐらん
居のききそら比ハ風もアやうにうて夜をいづつおん旅
好の人れ少きとよそ夜をいづつおれ居をいづて今
夜にほて衣をいぢとよそとけけうやぶの元も
清てけぐらんよそわんとよそわん

式子内親王

文より山入りし月とてとられずよ衣ふつと
山のくらく月とてふくしとちれ星に似らざるささや
よと文よりとてふくしとちれ星に似らざるささや
切底あり
九月十三夜月をまれくけつと詠わして後行り

道信銘に

秋つと夜文方月をれけつと乃了げあぞむらりか
九月十三夜八月のそとてふくしとちれ星に似らざるささや
大方よりばもてやけ秋の月とて夜をゆんたとていつくれが酒も
とてめづりけつとけつとゆんたとてふくしとちれ星に似らざるささや
のこつげあぞむらりか

ろり方よりけつ時

後京定く後銘に

獨ゆれ山をれ尾乃とてとられけつと乃了げあぞむらりか

かちり川のせり尾乃とてとられけつと乃了げあぞむらりか
とてめづりけつとけつとゆんたとてふくしとちれ星に似らざるささや
とてめづりけつとけつとゆんたとてふくしとちれ星に似らざるささや
とてめづりけつとけつとゆんたとてふくしとちれ星に似らざるささや
とてめづりけつとけつとゆんたとてふくしとちれ星に似らざるささや
とてめづりけつとけつとゆんたとてふくしとちれ星に似らざるささや

宗蓮法師

むらみけりけつと乃了げあぞむらりか
きよのせりけつと乃了げあぞむらりか
末よあてけつと乃了げあぞむらりか
けつと乃了げあぞむらりか
よそのせりけつと乃了げあぞむらりか
威愜あり

月のあつと後行る

大洞玄淨法師

言七 秋の夜ハ衣さししら辛ても月乃走よしし物をかき
月と申して夜をくさつたといふぞ衣をいせまて思ひしと
まのてらうらうらも月とふれがきさも定ぬ火月の走よ
ちかぢぢと後うらや云河邊の縁衣よも縁の河

九月はつらつらに

花山院流う

言八 秋のよはともや在月よ如にうらうらとてうられや孫をせ
あつちく孫あせりてはけそかりばくや在月よあつちく
孫をせりてこそふとてうられとてふ
け何去よ九月つらうら方と方そよりあよ十三夜の月
のうらとあつちく撰集ハ時をしのけ方とてうらうらよ
け集よハ時帯あつちくうらうらとてふ
あつちくをうらうら

宗道法師

言九 しらぬれ衣もつらぬれ衣のこしに在方走のや秋の夕ぐれ

松林源山よ方あつちく村白ハ毛さうりキそとて浮味
あつちく秋ハ夕ぐれ源山松林ハ村白うらうらとて松のこ
くこつちく松林源山松林ハ村白うらうらとて松のこ
松林の秀逸定家つらぬれ衣の神しのけいし宛連の
凡神

秋の夕ぐれ

あつちく天を

言一 さみ山の秋の夕ぐれあつちく松林源山
あつちく松林源山松林ハ村白うらうらとて松のこ
松林の秀逸定家つらぬれ衣の神しのけいし宛連の
凡神

河香とて

丸場督道

眼がよるをうれ神し居るをくち神と白をとりて
さくらんてし移るを瓜花れいそがくくさるるもあれ
とも門田乃るよ友の落穂まをいひらいて居るとんて
そらいて飛りる群しをさしよさしつうく移るもやりの
凡骨し

六十乃りすすし時月をす居るとまゆと

お久保正意系

二百廿一 ねやしうづぐ月の新さんてもお田のるよあつる居る
大江山丹波をお田のよえんゆか山いさむく月の暗の
月のあつくさきくもお田乃るよ居るの落るるを
眼がよるをさしよさしつうく

歌しつ

後念の師

二百廿二 じつやるをれおれし晴ゆるん移るつてやにほさう月新

秋の末宵の程は時毎のそと傳へけりしが小夜来て
居るのゆをよ月のほろくわらとて居れおれよ村を
のくれぬんよまゆと

皇太后交る文後女

二百廿三 ゆらまゆをわびしる知居のむとにありては方おれおれ
そらをい居る知居の着きては方おれおれと起よては移るるを
とゆれとまゆと

二百廿四 秋の神よ吹ゆる風のそとをさしうけて居るもあつくさう
旅をよ山流をいおれよ風をけりく風のそと神よ吹ゆるを
まよ居るも同くまゆと起よらてまゆと移る風情を白らまゆと

卒すしすすし時月をす居ると 官内卿

二百廿五 春をいれおれし時月をす居るとまゆとまゆとまゆと

昔よきをいふもさうらうとあはれしをいふはいとよき
とてやあはれしよきとてさうらうはあはれがおもひあはれ
まはれしそこそいふをいふはいとよきとてさうらうのまにまはれ
いらと月新なるまがさしにいらと月新なるまがさしにいら
そよらとてさうらうの月新なるまがさしにいらと

色ね院御時内裡よりさうらうにいらとて結
び付たり

花園左大臣室

二百六十九よのうらひぬも昔よきよの歌をいひよき
何とて能くいふ言ふし禁なく秘し秘し秘し秘し
歌よてあはれしよきとてさうらうと月新なるまがさしにいら
とてさうらうの月新なるまがさしにいらと

歌

松中御玄定歌

二百七十今よりハス後花もさうらう物といふとくはあはれしよき
とてさうらうの月新なるまがさしにいらと

工の句ハ不是花中偏愛菊此花同後更無花の心
句ハあはれしよきとてさうらうと月新なるまがさしにいら
とてさうらうの月新なるまがさしにいらと

かれゆく世もいふとてさうらうと月新なるまがさしにいら
とてさうらうの月新なるまがさしにいらと

二百八 秋風よあはれしよきとてさうらうと月新なるまがさしにいら
とてさうらうの月新なるまがさしにいらと

あはれ

大江赤言

二百九 秋風よあはれしよきとてさうらうと月新なるまがさしにいら
とてさうらうの月新なるまがさしにいらと

子種の花をもちりしもかとうくもさうさうし袖乃をち
およとさまがいゝづ拓ゆせくの秋さよとよめるじ

・秋乃奇とて ちよ天皇

言五 秋わけぬる言や暮夜のさうりげやかひさしむ言せ
の月
さうりげの言さうり秋も今さうりさうり秋の言せ
にさうりや言せもさうり言せの月もさうり言せさうり
めさうり言せ
さうりや言せさうり秋のさうり言せさうり秋はげさうり
さうり言せさうり言せ

右秘訣を先沙を山和為時秘藏之書白
屋門人不以狼傳之予有が被許者見者
常く佗見不の力也や 穴波

三月六兩年年臘月望中島元孝 耶



